

補語を以てせるもの。

山櫻わがみにくれば春霞峯にも尾にもたちかくしつゝ。
逢阪や場所を提示せるなり。梢の花をふくからに嵐ぞかすむ關の杉村。
櫻花(主語たると同時に「見む」の補語たり)さかばかつ見むと思ふまに日數へに
けり。春の山里。

またや見む。片野のみの、櫻狩花の雪ちる春のあけぼの。
駒とめてなほ水かはむ。山吹の花の影そふ井出の玉水。
再歸的獨立提示語は提示語として立てれど本文にありては之が空位を補はむ
が爲に代名詞を置きたるなり。其の例左の如し。

主語の例。

凡古言を解せむと心がくる者誰か五十音の反切によらずして釋し得らるべ
き。

補語の例。

白雲のたつ田の山の八重櫻いづれを花とわきてをらまし。
ちる花の忘れがたみの峯の雲をだにのこせ春の山風。
アルコホール之を譯して酒精といふ。
不忍池詩人は之を小西湖といふ。

連體語の例。

林子平、高山彦九郎、蒲生君平この三人を寛政の三奇士といふ。
連絡的提示語とは其の提示語が獨立の形をとらずして「は」の助詞によりて句の
先頭にありて語形上の連絡を保ち居るものなり。この際には格助詞を有せず。この
故に主語に似たるを以て誤認して主語となすことあり。注意すべきなり。
抽出的連絡提示語は補語に多し。左の如し。

春日野(ヲ)は今日はなやきそ。若草のつまもこもれり。我もこもれり。
霞たつ春の山邊は遠けれど吹きくる風ニは花の香ぞする。
春たてど花もにはほはぬ山里ニはものうかる音に鶯のなく。
一枝を折る者(ヲ)は一指を切らむ。

かの俗なる

上州は前橋に御座います。
などいふも亦この抽出的連絡提示語法によれる連體語なりとす。

再歸的連絡提示語も亦補語に多し。

餘は之を記さず。

君の令名は夙に之を聞けり。
大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

この種のもものは、はなくて元の助詞のまゝの次の如きもあり。
これを見よ。人もすさめぬ戀すとてねをなく蟲のなれる姿を。

第三 句中に於ける語の相關

この條に於いては句成分が相保合して句を構成する上に於いて意義上如何なる状態を呈するかを説明せむとす。而、この條に於いては陳述の修飾語と述語との相關をば主として説かむ。その他は特に説くを必要とせざればなり。

修飾語中述素を裝定する陳述の修飾語の存することは既に述べし所なり。この陳述の修飾語は其の意頗嚴密なるものにて、之が句中にある時は述語の様式も必これに一致すべきは自然の必要にして、若之を背くときは修飾語が必然の意味をあらはせるに述語が偶然なる意をあらはすが如き矛盾を生じて、更に意義なきものとなりはつべきなり。かく陳述の修飾語と述語とが意義上の一致に來らざるべからざるは、實に陳述の修飾語の本性によるものなり。この状態を陳述の修飾語と述語との相關と稱す。今その大略をいはむ。

述語中に必否説のあるべきもの。否説用言のなしか、否説の複語尾

かの人はよも虚言はいふまじ。
敵は小勢なりとも決して侮るべからず。

決して悪友と交はることなかれ、

かゝる事とは毫もしらざりき。

よに逢阪の關はゆるさじ。

をさく立ちおくれず。

をさく出でたまふことなし。

人はいさ心も知らず。

え言はず。

えこそ見わかね。

さらし知らぬ事なり。

さらく厭ふべきにあらず。

ゆめく疎略を存せず。

述語の必正説たるべきもの。

うべ山風をあらしとはいふらむ。

うべとこなつにこひしかりけり。

實に汝のいへるが如し。

誠に仰の通りなり。

げにく我あやまちたりけり。

述語の必確説たるべきもの。

人生志を得ばすべからく權をつくすべし。

余は必ず約束の如くすべし。

述語の必想像たるべきもの。

明日も多分天氣ならむ。

あるひは余が誤解なるべし。

恐らくはかの説眞に近からむ。

疑ふらくは彼は偽君子ならむ。

よもや忘れはすまじ。

述語に必反動を起すべきもの。

豈に他あらむや。

況んや人間に於いてをや。

志清ければ何ぞ恐るゝにたらむや。

不肖なれどもいかでかかれにまくべき。

述語に疑惑の態あらしむるもの。

けだし門よりかへすらむかも。

此説けだし眞に近からむ。

もしは之わが心の迷ならむ。

今日はもし君もや訪ふとながむれば。

述語が禁制の意をあらはすもの。

ゆめ見せ給ふな。

ゆめ／＼疑ふことなかれ。

決して過度の勉強をばしたまふな。

述語が希望の意をあらはすもの。

いかで見せ奉りなばや。

願はくは花の下にてわれ死なむ。

何とぞ御來車下されたし。

述語が詰問の意をあらはすべきもの。

郭公など我宿に一聲もせぬ(か)

秋の蟲なにわびしらに聲のする(か)

なぞ世の中の玉櫛なる(か)

述語が假設假容の條件なるべきもの。

若天氣よくば散歩せむ。

たとひ千騎もあれ萬騎もあれ。

たとひうれへ侍りとも何の悔か侍らむ。

さてこれら修飾語の意義は個々に異なれば従つて又其の述語も區々ならざるべからず。それらは一々こゝにあぐべきにあらず。

第四 不完體の句

吾人の談話文章はいつも正式の形をとりて發表せらるゝに限らずして多くの場合に於いては、其の文に活氣をそへむが爲に本來必要なる形式なりとも、思想の發表に障礙を來さざる限りは其の成分を脱漏せしめて發表するなり、かくて脱略せしめられたる言文は簡短にして便利なるのみならず、又實に文の活動を助け、情熱を含め、直截に陳述しうる勢力を有す。

さてこれらの句はその成立の本源にさかのばれば、二様あるをみる。一は未成體の句と稱すべきものにして原始的の思考をあらはし、一は略體の句と稱すべきものにして慣用上簡易にせられたるものをあらはす。しかも、この二者は嚴密に區分せられべきものにあらず、さりとはいへどもなほ研究上の便宜によりて二分してのぶべし。

(一) 未成體の句

こは思想がいまだ十分に發展しをらざる際に突然として發表をなす形式にして、小兒の言語に多くあらはるゝなり。成人といへども、その感情の激昂せる際、痛切なる際、又は急遽に思想を發表せんとするときは往々かくの如き未發展の體にてあらはす。この種のものにてはその心理的現象の主たるものを發表するか、若くは最も容易に發表しえられたる言語を以てするものなるが故に、之を規定すること難し。されど、大體は之を分ちて見ることをうべし。即一は對象をさすもの、二は屬性を叫ぶものこれなり。

對象をさすものに又二つあり。一は實體の名をさすものにして、たとへば

犬

といふが如し。この時の「犬」といふ句は之を展開せしむれば、

犬あり。

犬走る。

犬叫ぶ。

犬は我を吠ゆ。

我は犬を恐る。

などの思想となることをうべきものなり。

對象をなすものゝ第二は代名詞を以てさすものなり。この時は實體の名をだに

あぐる違なきものにして、たとへば、

あれ、あれ、

などいふ如きこれなり。この時の「あれ」といふ句は之を展開せしむれば、

あれを見よ。

あの物のさまは云々の如し。

あの物は何ぞ。

あの物はかゝる事をなせり。

などの種々の意をあらはすに用ゐらるゝなり。

屬性を叫ぶものとは、たとへば自家の感情をあらはすに、

あいた。

愉快々々。

などいふが如きこれなり。

中古の文の例にていへば、対象をさすものは、

あなはら。

といひて「腹痛の烈しき」をいひ、

あなかま。

といひて「かしがまし静にしたまへ」といふに用ゐたるが如きこれなり。

これらはその句としての形をなさざるものにして心理學者が「幼蟲狀の句」(Satz im Lativzustande) と稱するものにして、*Satz* 氏が所謂 *Satzäquivalent* にあたるものなれば、完全なる句としての取扱をうくべきものにあらざれども、しかもかくの如きものを全く吾人のこの論より放逐しうべきにあらず。

(二) 略體の句

略體の起る動機は著しき觀念をのみ存して他を脱却し、その體を簡潔にして印象を強からしめむが爲なり。而、それらは皆述體の句に行はる。喚體の句は元來十分に緊縮したるものなるが、其の以上略すべき餘地なきが故なり。

この省略の行はるる契點を顧みれば次の如く數種あり。一は主語補語の省略せらるゝもの、二は述語の省略せらるゝもの、三は連體語の主體の省略せらるゝものなり。この外助詞の略せらるゝものもあれども、それは略體の句とはいふべからざるなり。されど、まづ念の爲これをもあはせあぐべし。

一、體言と用言との關係を示す格助詞を省くもの。

昨日こそさなへ(ヲ)とりしか。

筆(ヲ)とりて字(ヲ)かく。

これらはすでに第一部第三章にて述べたるものなれば、ここにはのべず。

二、連體語の主體たるものを省略し、この連體語を以て體言の位地を占めしむるものなり。

この歌は柿本人麿が(歌)なり。

前の守も今の(守)ももろともに下りて今のあるじも前の(守)も手とりかはして。

但、これらも亦略體の句とはいふべからざるなり。主語又は補語は句中にあらはれざること多し。これらの場合を尋ねれば、次にあぐるが如く、種々あり。されど、こはなほ省略せられたりといふべきものにあらずして、寧ろあらはれざるものといふべきなり。即その主語補語を省略したるものにあらずして、主語補語をば、次の如き場合には句中にあらはさずともその意は通ずるものなりなどいふを適當とす。さて、これらの第一は説者が自らの事をいふ場合には、それを代表する語をあらはさざることあるなり。

説者が主語たる時のもの。

(我は)乞ふ(我は)これを歴史に見む。

説者が補語たる時のもの。

健夫も(我を)またむとし子も(我を)待たむ。

若よき工夫あらば(我に)教へよ。

願はくは(我に)幸を下したまへ。

君よ(我と)共に遊ばむ。

第二は説者と聽者と共に共通する事物を述ぶる時にそれをあらはさざることあるなり。

主語たるべきもの。

(我等は)之を以てたゞちにその起點とはいふべからざらむ。

(人々)又は(我は)野には雲雀をさく。

補語たるべきもの。

疑義あるものは(其疑義を)余に(質問すべし)。

余は(其事を)少しも知らず。

(君は五郎を見しか)我昨日(五郎に)あひたり。

吾は(かの書を)讀まざりき。

(我と君と)昨日(上野へ)行きたる時は面白かりしかな。

第三は對者に關するものなるときは之をあらはさざることあり。主語たるべきもの。

若しよき工夫あらば(汝)我に教へよ。

(君は)何時頃御在宅なるか御一報を乞ふ。
補語たるべきもの。

余は門前にて(汝を)またむ。

余は今之を(君に)呈すべし。

第四は一旦上にあらはれたる事物なるときは下に至りて特に之をあらはさざるなり。

主語たるもの、

一面の松林相連る。(これ)すなはち御料地なり。

補語たるもの、

人は(我を)誹るとも我は(人を)誹らず。

父は酒を飲めども余は(酒を)飲まず。

人皆車よりおりたれば余も(車より)おりぬ。

月清くば(我)月を見む。

汝は花見に行きたるか我は(花見に)ゆかず。

第五は熟知せられたるものなるときは、之をあらはさざることあり。

主語たるもの、

(彼は)憐むべき少年なり。

補語たるもの、

實朝の(公曉に)弑せられしは承久元年なり。

第六は一般の人又は不定不明のものを主語とすべきものは之をあらはさざることあり。

(何人も)この樹木折り取るべからず。

(何人も)塵芥をこゝにすつべからず。

(世人)本年は臨時議會開かるべしといふ。

第七稱謂をあらはす句にありては殆一般にわたりてその主格たるべきものを句中にあらはすことなし。これ國文の特色の一なり。

これをば下の社とはいふ。

名をば讃岐の造磨となむいひける。

述語は句として最緊密なるものなるになほ之を省略して句の勢を強めむと企つること屢あり。これ即上にのべし省略述法をとれるものにしてかくの如きものこそ即省略體の句といふべきものなれ。

一、賓語のみを存して述語の省略せられたるもの、
人の心はこれぞ世の常なる。

打出づる波や春の初花(ならむ)。

語るやうつゝ(なる)ありし世やゆめ(なる)。

いと勇ましきことにこそ(あれ)。

二、述語を省略せるものは或は主語のみ又は補語或は修飾語を存するもの、
近けれど何かはしるし(ある)。

常に逢ひみむことをのみこそ(思へ)。

思ひいづるにつけてかくなむ(詠みける)。

三、修飾語のみのもの、

静に(あれよ)。

まこと(汝の言の如し)。

なぞ(その事は)。

この第三の場合のものは真に略體の略體たる所以の極端にあらはれたるものにして未成體の句に殆同じといふべきさまのものなり。

さてかゝる省略體は如何なる機會にあらはるゝかといふに、多くは日常應酬の語の間にあらはるゝものにして、特に著しきは應答の際にあらはるゝなり。その他俚諺格言等にも亦多く詩歌にも多し。特に俳句の如き短詩は最かかる語法をとるに適す。

應答の例。

問

主上はいづくにおはしますぞ。

上皇は(イツクニオハシマスゾ)。

内侍所は(オハシマスゾ)。

中宮はいづくに(オハシマスゾ)。

君の左の一の座はたぞ。

右の一の座はいかに(オハシマスゾ)。

さてその次はたれ人ぞ。

さてその次は(タレ人ゾ)。

答

黒戸御所に(主上ハオハシマス)。

一本御書所に(一本御書所に)。

温明殿に(温明殿に)。

夜御殿に(夜御殿に)。

清涼殿に(清涼殿に)。

彼れこそ秩父の重忠よ。

これぞ三浦の義盛よ。

(彼)里見の源太といふ人よ。

(彼)豊島の冠者といふ人なり。

(會我物語)

俚諺の例。

掃溜へ鶴()。

武士はくはねど高楊枝()。

花は櫻に人は武士()。

人面獸心()。

鷺を鳥。

うつればかはる。

歌の例。

我君は千代に

(八千代に)

(さゞれ石のいはほとなりて苔

のむすまで)

俳句の例。

奈良七重七堂伽藍八重櫻。

いざさらば雪見にころぶところまで。

鶯や柳のうしろやぶのまへ。

川上は柳か梅かも千鳥。

すべてこれら省略の極端なるものに至りては一見直に其の意を知りうべきものにあらず、必何等かの約束の上に説者と聽者とが契合せる上にての事なり。たとへば。

奈良七重七堂伽藍八重櫻。

(六玉川の歌)

陸奥千鳥武藏調布近江萩山は山吹紀毒津うつ木。

の類は之を註解するものありて適當に觀念をよび起すにあらずば、一の譬語と何の異なる所なきに終るべきなり。即これらは山は山吹を除く外は句なることを知

るべき特徴だになきなり。かゝるものは嚴密にいへば句と稱すべきものにあらず、常規を以て律しうべきものにあらざるなり。

第四章 句の運用

この章に於いては句の如何に運用せられて文をつくるかを論せんとす。而、先、句と文との關係につきて再説くところあらむ。

さきにもいひし如く、吾人の句と稱するものは思想發表の一單位をさしたるものにして文の素たるものなり。而、その性質と組織とは前二章に於いて説明したる所なり。その句は之を運用するにあたりて文をなす。文とは句の實地に運用せられて人間の思想發表の用に供せられたる場合の名なり。

從來は吾人の一の句なりとするものを以て直に單文と稱し、之に對して重文複文等の名目を設くるものの如し。その重文複文とは單文を二個以上結合せるものなりといふものの如し。しかれども、吾人の思考によればすべての文はそれ自身として單體たりといふべきものなり。而、文を二個重ねてなほ一の大なる思想を構成するものゝ如きは之を章節段などいふべきものにあらずや。

廿三日、八木のやすのりといふ人あり。この人國に必ずしもいひつかふ者にもあらざるなり。これぞ正しきやうにて馬の餞したる。(土佐日記)

かくの如きものは、即文法上に所謂單文を集めて構成したる文といふべきものなり。かくの如くなれば、單文重文複文などをその文の構造の單複によりて名づけたるものなりといふはよし、單文一にてなれるもの、單文を重ね合せてなせるものといふ事はその意をなさざるものなり。この故に著者はこれらの誤を正さむと欲してこゝにこれらの區別を明にせむが爲に文の素たるものを以て句と稱し、その句の單複によりて文の種類を命名することとせり。即本書に句と稱するものは從來の所謂單文に似たり。しかれど、さきにもいへる如く著者は句と單文とは必しも同一のものと稱するを肯んせず。句は文の素にして文は句の運用方法によりてなれるものゝ名なり。この故に一の句にてなれる文は單句の文略して單文といふべく、二以上の句を重ねてなれるものは、重句文略して重文といふべく、二以上の句を合せてなれるものは合句文略して合文といふべし。

かくの如くに吾人は句と文との區別を立て、その一の句にてなれる文をば單文と稱し、二以上の句にてなれる文をば複文と稱せむと欲す。こゝに複文と稱するものは、思想上の必要によりて結合せらるゝのみならず、言語の上に於て外形上結合せられたるもの、即結合の關係が形式上特別の状態を呈し、言語上の拘束を有するものならざるべからず、即ち思想上の關係あると共に文法上の關係あるものにあらずば、之を一體なりと認むること能はざるものなることを注意せざるべからず。

この故に次の文の如きは思想上二單文は關係を有して一の統一體と見らるれども、文法上にては一個體ならずして二個體なり。

「春は來ぬ。」「されど、花はさかす。」

「きのふこそさなへとりしか。」「いつのまにいなばそよぎて秋風のふく。」

上なる文を終結の語法をとらずして、則ち陳述を完了せしめずして陳述しつつなほ之を下文にならかの關係を有せしむる語法をとる時は、こゝに於いて始めて文法上の複雑なる文とはなるなり。

「春は來ぬれど花は咲かず。」

きのふこそさなへとりしを、いつのまにいなばそよぎて秋風のふく。こは文法上の例にしてこの歌をかく添削せよといふにあらず。讀者誤解すべからず。

又事實は更に關係せぬものにも陳述の方法上相連續したる形式をとりたるものも亦文法上の複雑なる文と稱す。かゝる文法上の複雑なる文を略稱して複文と稱す。今先單文につきて論じ、次に複文にとき及ばさんとす。

第一 單文

單文とは一の句にて成立する文なること既にのべし所なり。されど如何なるものが單文なるかは句の研究以外に説くべき點なきにあらざれば、こゝに之を説か

む。

(一) 單文の構成

單文は一の句にてなるものなり。その句には喚體述體の區別あることは前に述べたり。その成分たる各種の位格が多數あることも前に述べたり。又その一位格内に多數の單語の存することもあるは既に述べたり。この故に單文とは從來の説明の如くに狹隘なるものにあらず。されば、次の如きものは、皆單文たるなり。

(イ) 西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允は即維新の三傑なり。

(ロ) 彼はあまりの樂しさに歌ひ舞ひ踊り狂へり。

(イ)は主語たる地位に名詞三を有し、(ロ)は述語たる地位に動詞四を有す。かくの如く單語の數は多けれど、句としては一個にすぎず。この故にこは單文たること明なり。從來或はこの「イ」の如く主語中に三語あるものは三の單文を縮めて合せたるものなりといへり。しかれども、この文にありては「西郷、大久保、木戸」の三人なくば「維新の三傑なり」といふ述語に對しての主語たりうるものにあらず。若果して前述べし如き説を正しとせば、「西郷隆盛は維新三傑なり」といふ奇怪なる語をなすに至らむ。その他たとへば、「滿洲軍なり。」明治三十七八年戰役の際の()といふ述語に對しての主格とは「大山大將兒玉大將」を始め、「一二等卒」まで、幾十萬人の姓名を列擧して一の主格と

なすべき性質のものなり。但、かくの如きことは實際上なしうべきにあらざるが故に便宜上數名をあげて他を略し、「大山大將兒玉大將等は滿洲軍なり」といふ如き形となすなり。これら皆主格としては一なれども、その内に含まれたる單語の數は多きなり。又(ロ)の如きもの即述語内に多くの用言を含めるものも亦多數の單文を縮め合はせたるものなりといふ説あり。されどこれも亦前同様の理由にて不可なり。即「歌ひ、舞ひ、踊る、狂ふ」は區々に行はるゝにあらずして、一の原因よりして一の場所に於いて一の時に一の動作として起れるものなり。唯吾人が之を語る爲に四の動詞を用ゐたるにすぎず。若單文とは一の用言を以て述語となすものなりなどいふことにせば、この(ロ)の如きは「歌ふ」「舞ふ」「踊る」「狂ふ」の四動作を別々にあらはすにすぎずして混成的の一動作をあらはすこと能はざるに至らむ。この故に單文といふことの上には主格又は述格内の單語の數の多少は要件たらざる者と知るべし。又

君幼より聰敏にして専ら學問を好み、徳性を養へり。

潮はいよく川に満ち、残照を浮べ、青蘆の影を載せ、白き泡を運び、漫々として

まさに板橋を浸さむとす。

の如きもその各用言が補語を有し、その補語が連體語を有し、又別に修飾語を有しなどするによりて複雑に見ゆるのみ、又主格の語が二個以上ありとても單文たるに妨げなきことは既に前章に述べたる所にて明なり。

友も我も痛く疲れて砂の上に坐せり。了
 父母の恩は山より高く海より深し。
 夜と共に峯へ麓へ下りのぼり行く雲の身は我にぞありける。
 内省疚しからざる如き屋漏に愧ぢざるが如き皆これ誠なり。
 すべてかくの如きことは文の重複に關係することなきなり。
 さて又次の如くに同格語の存在は單文たるに關する所なしと知るべし。
 唐の物は藥の外は無くとも事かゝす。
 英國人も米國人も露西亞人も此國の人には及ばず。
 余は月をも花をも愛す。
 金剛石は鐵よりも水晶よりもかたし。
 又その主格補格資格たるものが準體言にてなれる場合にそが句たらぬ限りは如何に複雑なりとも單文たることを失はず。
 あれに浮びて見ゆるが江の島なり。
 節に死ぬるは君子の本懐なり。
 板を浮べて手にもてるは游がんとする人なり。
 これ亦貯蓄の法に基せるなり。
 さて單文は一の句にてなるのみならず、なほ他のものをも伴ひてあらはるゝこ

とあるなり。その伴はれてあらはるゝものとは句に對する修飾格の語と接續格の語と獨立提示語と呼格の語となり。
 あはれ今年の秋もいぬめり。
 あはれうるはしき月かな。
 すは敵陣みだれ立ちたるぞ。
 の如きは感應の修飾語を伴ひてあらはるゝものにして、
 いで人はことのみぞよき。
 いざくみてみよ、山の井の水。
 いでやこの世にうまれてはねがはしかるべき事こそ多かれ。
 やよやまた山郭公。
 の如きは呼應の修飾語を伴へるものなり。又
 一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし。
 一、軍人は禮儀を正しくすべし。
 などの如き秩序を維持する爲の修飾語をも伴ふことあり。
 接續格の語を伴ふものは上の文と意義上の連絡あることを示すものなるが、なほこの文中の一部分なるを失はず。
 さらばそのみやつかひ人なり。

されば人々のいふ所全く據なきにあらず。

(志堅し)且つ望遠し。

然れども余は一々之を駁する愚をなさず。

獨立提示語は既に前章にのべたるものなるが、これも亦文の一部なることを失はず。

不忍の池詩人は、之を小西湖といふ。

林高山蒲生、この三人を寛政の三奇士と稱す。

これらはその形よりいへば句の外に立ちて呼格に似たれども、全く句中のものなり。單文と稱するものはかかるものをも含むべきこと論なし。

次は呼格の語なり。呼格の語はそれ自ら一の句をなすことあるは既にのべし所なり。而それらは即それにて單文と稱すべきものなり。

心あひたる友もがな、面白の春雨や。

しかるに呼格の語はかくの如くある思想をあらはすにあらずして、たゞある對象を指示して、注意をこれにむけしむるまでの用に供せらるゝ者あり。かくの如きはこれにて一の文をなすといふべからず。即文の一部分たるものにして獨立して文の資格を具するものにあらず。勿論さきに所謂未成體の句として認めらるべきも

のはこゝにとく必要を認めず。この故に著者は呼格をば三様の用法ありと認む。一はそれにて喚體の句をなすもの、一は未成體の句をなすもの、一はこゝにいふべきものにして文の一部分たるべきものなり。從來の文法家全く呼格を放棄して顧みざるか、若くはすべての呼格を混一してみな一の文の資格を具するものとせり。共に極端にはしれるものといふべきなり。

さてかくの如き文の一部としてあらはるゝ呼格は種々の状態を呈す。まづ喚體の句に對しての對象を指示するものあり。

あはれ月こよひの月のさやけさよ。

述體の句に對してはその主者を呼格にてあらはすことあり。

まろがまろねよくよへぬらむ。

その月よいづら。

又希望命令などの對者を呼格にてあらはすことあり。

郭公まだしきほどのこゑをきかばや。

苔の袂よかわきだにせよ。

いざ子どもたは業なせそ。

月よ昔の物語せよ。

以上は事實上句の一部分たるべきものなるを特に注意を喚起する爲に呼格とな

したるものなり。かくの如きものは句と同様の價值ありとはいふべからず。而又別に呼格の語をば句に添へたるもあり。

此の頃のをしのうきねぞあはれなる。上毛のしもよ、下のこほりよ。

さてかゝる呼格の最多くあらはるゝは對話的の文に多し。對話的の文にありてはその對者をあらはすに多く呼格の語を以てす。そのうち特別なるは命令希求の文にありては、句中の主語たるものを呼格とすること多きものにして既に上にあげし如きものなり。しかるに質問應答の際にはその第二者第三者をば、句中の位格とは全く獨立に呼格としてあらはすことあり。たとへば、

瓢や瓢や我汝を愛す。

春の野にところ求むといふなるはふたりぬばかりみでたりや、君。

(拾遺集)

やよしぐれ物おもふ袖のなかりせば、木の葉の後に何を染めまし。

(新古今集)

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。

あが君や、いつかたにかおはしましたぬる。

少納言よ、なほしきたりつらむはいづら。

あが君や、すべてきこえさせむ方こそ侍らね。

(今昔物語)

やおのれ、かくありけるは、

(源平盛衰記)

これらは、たゞ呼掛くるのみにして一の思想をあらはしたるものにあらねば、句としては無關係のものなれども、文としては一部分たるものといふべきは明なり。

(二) 單文の用法

従來は單文の用法などにつきては何等の研究をなすことなく、又研究の必要もなしと思へるが如し。されど、それはあまり疎雑なり。英文典などにて鍛鍊せられたる人ならばなほさらに、これらの點に注目すべき筈なるに、何故に之が研究を疎にせしにか。余がこの點につきて次下に述ぶる所を見て、いかに研究の必要の存するかを見るべし。今これらの研究をば二の方面に分ちて見る。一は稱格の方面より見たる用法にして一は他の文との關係より見たる用法なり。

一は稱格の方面より見たる用法
すべての文は之を稱格の方面より見て自稱、對稱、他稱の三類に分ち見ることをうべし。而この三方面は文の用法として特種の狀態を呈す。自稱の文は、その主格は文中にあらはるゝことなきを常とす。この事は既に略體の句の條に説きしもの

なればこゝに之を再び説かず。

對稱の文は對者を主格にたゞしむる時と對者を呼格として之に疑問希求等を提出する場合とあり。その對者を主格とする場合には往々その主格の語を文中にあらはさざることあり。又その對者を主格となさざることある場合には、そを呼格としてあらはすこと稀ならず。

瓢や瓢や我汝を愛す。

時鳥まだしきほどのこゑをきかばや。

あが君やをさなのものいひや。

少納言よ直衣きたりつらむはいづら。

少納言よ香爐峯の雪はいかならむ。

やおのれかくありけるはたゞ來れ。

いかに金子殿この馬何法の馬にて候ふぞ御らんせよ。

いかに佐々木殿遙に見參し來らずあの御馬は上より賜はりてか。

續くか小次郎誤すな誤すな。

げに／＼佐々木殿たやすくも盗みいだし給へりこの定ならば景季も盗むべかりけり正直にてはよき馬は儲くまじかりけり。

春の野にところ求むといふなるはふたりぬばかり見てたりや君

(拾遺集)

やよしぐれ物おもふ袖のなかりせば木葉の後に何を染めまし。

(新古今集)

やあ正綱頼將が十四歳に遇ふこと再びやあるべき。

いかに與一あの扇のまんなか射て敵に見物せさせよかし。

やよ正行汝は父の遺訓を忘れたるか。

(今はおろしてよ翁(我は)しえたり。

他稱の文にありてはその主者の一定せると漠然たるとによりて定稱と不定稱とに分ちて見る。定稱のものにありては通常主格をあらはせども不定稱のものにありては主格をあらはさざること多し。

さてこれらの區別は記載語に於いてはさまで用なきが如くなれども、さにあらず。たとへば

これよりうち猥りに入るべからず。

この樹木を折るべからず。

本年は臨時議會開かるべしといふ。

世に稱す。

行修まらざれば學ばざるに如かず。

の如く汎く世人をさして主格に立たしむるもの。又

高山、蒲生、林を寛政の三奇士といふ。

今内裏のひんがしのちんをば北の陣とぞいふ。

名をば讃岐の造鷹となんいふ。

都を東京となづく。

うぐひすを春告鳥といふ。

西郷大久保木戸を維新の三傑と稱す。

此山の名を何とか申す。

の如く稱謂をあらはすものは、その主格を文中にあらはさざるを以て國文の通慣とするが如き事あればなり。

二 他文との關係より見たる用法

この項に於いてはその單獨の用法と關係を有する用法とを分ち見るべし。

(一) 單獨の用法

文はその成立要素たる句の性質によりて、その性質を決定せらるゝものなれども、實際の用法は決して單純なるものにあらず。

先、それらが、その句の表面の意義のまゝに用ゐらるゝことは今更にはすとも可

なるべし次にそれが特別に用ゐられたるものをあぐべし。たとへば叙述體の句にて、

機密の事を漏洩すべからず。

圓山に遊ばゞ山陽先生の墓をとふべし。

の如く義務を對手に示し、事實上命令禁止をあらはすことをもうべし。然れども、これ命令體の文にあらず。又

右の問題の解答を問ふ。

の如く、叙述の形を以て疑問をあらはし、

上の方程式をとけ。

の如く命令體を以て疑問をあらはすことあり。されど、それは疑問體などいふべきものにあらず。又疑問をあらはす形を以て實際上種々の用に供することあり。たとへば、

汝はまだこの事を了へぬか。

は催促をなして實際は命令をなせり。又

あつばれの豪傑を死なせたるか。

は感動をあらはせり。すべてかくの如きは枚擧するに違あらず。反語などいふものは即表裏相反せる意義をあらはすものをさせるなり。

(二) 關係ある用法

これには、相重なりて一團の文章をなす用法のものあり。又相合して一團となりて思想をあらはす爲に前提の地位に立つ用法あり。又上なる文をばその文の一成分として説明するが如き關係に立つものあり。

相重なりて一團の文章をなすものは次の如し。

是を是とするは諂へるに近し、非を非とするは謗るに近し。

獅子に克つものは勇者なり、世界を征服するものは勇者なり、みづから克つものはさらに勇者なり。

花は櫻木、人は武士。

柳は緑、花は紅。

鳥なくか、花さくか。

秋はきぬ、紅葉は宿にふりしきぬ、道ふみわけてとふ人もなし。

他の文と相合して一團の思想をなす爲に前提の地位に立つものは次の如きものなり。

何はともあれ、先づこの事を成さざるべからず。

ふきわたす御萱が上に秋の夜の月の雪こそ先づつもりけれ、これは此太郎君のなり。

果して君の言の如くならんか、これ一大事なり。

今こそかくあれ、昔は我も世に用ゐられしものなり。

吾に教へよ、ゆきてうらみむ。

蓋しこれあらむ、われ未だわれを見ざるなり。

心うし、ふかき山にも入りにしが。

春になりぬ、されどなほ冬のこゝちす。

諸車通行止、但し空車は此限にあらず。

この時は形の上には下の文と關係なければ、意義の上にては複文の用をなす。このうちに特に注目すべき價值あるものは、「こそ」の係を有するものと、許容法にてなれるものとなり。

「こそ」の係を有するものは下の文との意義上背戾を示すこと多し。この時は「然れども」などいふ接續語を間におきて意をさとりうべし。

形こそみ山がくれのくち木なれ、(心は花になさばなりなむ。

その説こそ陳腐なれ、(文章は頗る見るに足る。

花すゝき我こそ下に思ひしか、(穗に出で、人にむすばれにけり。

春の夜のやみはあやなし、梅の花色こそみえね、(香やはかくるゝ。

きのふこそさなへとりしか、(いつのまに稻葉そよぎて秋風のふく。

あだなりと名にこそたてれ (櫻花年にまれなる人もまぢけり) 許容法にたてるものも亦時として上の如き意義を呈し、反撥的勢力を有するこ

とあり、この時は上に「しも」といふ助詞ありて之にかへる時を多しとす。時しもあれ(然るに)秋しも人のわかるれば、いと袂ぞ露けかりける。をみなへしおほかる野べにけふしもあれ (うしろめたくも思ひやるかな。

君しもあれ (道のゆきを定むらむ過ぬる人をつわづれつゝ、

たとへ千騎もあれ萬騎もあれ) (一方は射拂はんするなり。

ともあれかくもあれ) (とくやりてむ。

鬼にてもあれ何にてもあれ) (抱け。

何にもあれ) (手に當らむものを取りて棄てずしてもちたれ。

あふ事はとまれ。かくまれ) (なげかじを。

何はともあれ) (尋ねみばや。

たとへその志はよきにせよ) (その行ひはよみすべきにあらず。

ありとあるかぎり、みこにもおはせよ、上らうにもあれ) (おもてやはみえ

たまへる。さて又かくの如く條件を示し、又は注解をなす文をば他の文の中間に挿入する

ことあり。

余は昨日君を尋ねて行きしが(路たがひしか)終に君に行き逢はざりき。

今日わかれあすは近江とおもへども(夜やふけぬらん)袖のつゆけき。

約束したることは(人はいさしらす)我は必ず之を守らむ。

明後日(即十一月三日なり)は天長節なり。

をみなへしおほかるのべに(けふしもあれ)うしろめたくもおもひやるかな。

巡査は賊を追跡せしかど(時おそかりけむ)遂に空しく歸り來ぬ。

わが俄に歸國せしは(君や知らざりし)弟の病を訪はむとなりし。

第二 複文

二個以上の句が相集まりて一層複雑なる思想をあらはし、言語上一の形式に統合せらるゝ時は、之を複文と稱す。かくて複文を構造する二個以上の句の相互の關係の状態によりて複文を三大類に區分す。

複文の結合方法も亦さきにあげたる同格語の結合方法に同じく三の方式あり。

- 一、並立
- 二、一致
- 三、次屬

並立組織になれる複文とは、其の結合せられたる句が同一の程度にて思想上對等の資格を有して相對的に結合せらるゝ關係の方式によりてなれるものをいふ。これ即句を重ねたるものなれば、重句文といふべく、略して重文といふ。重文の原成分たる各句は思想上に於いては互に對等の關係を有してその間に軒輊なきものなり。たゞ相接近して思想上に上すによりて之を一の形式的拘束によりて一體となしたるまでのものなり。而、この形式上の拘束は上なる用言の述語をば連用形になしたるものなり。

花咲く 鳥なく

鳥鳴く 花咲く

一致組織によれる複文とは、其の結合せられたる句が同一の程度にて文法上對等の資格を有して、しかもこの結合によりて混然たる一の思想を組織し出せる文の組織をいふ。これ即句を合して一の思想をあらはしたるものなれば、合句文といふべく、略して合文といふ。合文の原成分たる各句は形式上、ある拘束によりて結合せられてあれど、互に對等の資格を有し、而上なる句は下なる句の前件となり、下なる句は之が歸結となり、前後を合して一の新しき文となるなり。この關係は通例接續助詞によりて示さるゝなり。

花さくば鳥鳴く。花さけば鳥鳴く。

花さくど鳥鳴かず。花さけど鳥鳴かず。

次屬組織によれるものとは、一の句が文の本體となり、他の句がその文中に一の語の資格として附屬せしめられ、句としての獨立を奪ひ去られてある時の組織をいふ。この獨立を奪はれたる句は之を附屬の句又は略して附屬句といふ。附屬句を文中に有するものは之を有屬文と稱す。こは上の重文、合文の如く多くの同等なる資格の文が相互に結合せられたるものにあらず。附屬句が附屬關係として屬する所の主文によりて陳述せられたる全體の一成分としてのみ使用せらるゝ點に於いて異なり。

昔より賢き人の富めるは稀なり。

此歌は人麿がよみけるなり。

河原などには馬車の行きかふ道だになし。

香をだに勻へ人の知るべく。

複文のこの三類はかの二個體の結合方式の三種の状態たる

並立 一致 從屬

の區分より必然的に發生し來るべきものにして必しも國文のみに存すべきものにあらず。に英獨文典に二種に説けるは如何。英文典にてはこの合文と有屬文とを混同して一となし、Compound sentence と Complex sentence との二に分ち、獨逸文典にて

は合文と重文とを混同して Satzverbindung と Satzgefüge との二者に分てり。かくの如くにして吾人の合文は英文典にては Complex sentence のうちに攝せられ、獨逸文典にては Satzverbindung のうちとせらる。かれらのかゝる不確實なる分類をなせるは實地にあはぬ事にして徒に論理の二分釋法に迷はされたるものなり。これ實にこれらの結合の實相を觀取せざるものにして、分解と總合との觀察の方法に差異あるに思ひ至らざる偏見なり。然るに世にはかの英文典などの所説にならひて吾人の合文を以て有屬文なるかの如く説くものあり。これ亦例の盲從説を世に布けるものといふべきなり。この故にこの區別につきて少しく次にかむと欲す。

單文とは上にもいひし如く單句文といふ義にして一の句よりなれるものをさせり。即句とは文の成素をさす名なりと知るべし。かくする時は、即「一の句」とは化學上の所謂「元素」の如き概念にして文は即化學上の所謂物體に該當する概念なり。物體に一元素よりなる單體、二元素以上よりなる混合體、合成體あるが如く、文にも單文、重文、合文ありといふをうべし。

重文は二の句が唯形の上に重なりたるにすぎざるものにして化學上の所謂混合體に似たり。この場合にはその上句の述語が連用形をとるを特徴とす。

合文は著者の創見にかゝるものにして、接續助詞「ば」「ども」「とも」「が」「に」「を」等にて二句を結合して一の新しき意義をなす文をいふ。從來は之を複文と稱して、著

者の所謂有屬文と混一して説けり。而、それらの論者はこの合文の上なる句をば副詞句と稱せり。しかれども、この句は

- 花咲けば 鳥なく。
- 花は咲けども 鳥は鳴かず。
- 花は咲くとも 鳥は鳴かざらむ。
- 花は咲くが 鳥は鳴かず。
- 花は咲くに 鳥は鳴かず。
- 花は咲くを 鳥は鳴かず。

の如く、下なる句の意義を修飾限定せるものにあらず。但下なる句は思想の主たることは勿論なり。かくの如きものは上の句と下の句とが相合して一の大なる思想をあらはせるものにしていはゞ相持ちのものなり。而、これらは皆論理上の約結命題の如きものを構成するものにして上の句が下の句の條件たるが如き勢はあれど修飾する意なきは明なり。この故に之を副詞句と稱するはあたらざるなり。かくの如くなるにも拘らず、之を副詞句と稱する所以のものは其源英文典にあり。英文典にては文を單文、重文、複文の三に區分せり。

Simple sentence

單文

Compound sentence

重文

Complex sentence 複文

而吾人の所謂合文はこの Compound sentence 中に入るべき筈のものなるに英文典にては皆これを Complex sentence 中にとけり世の文典家の三分説はみなこれを墨守せるものなり。

しかるに之を獨逸文典にかへりみるに該文典は文の結合をば、

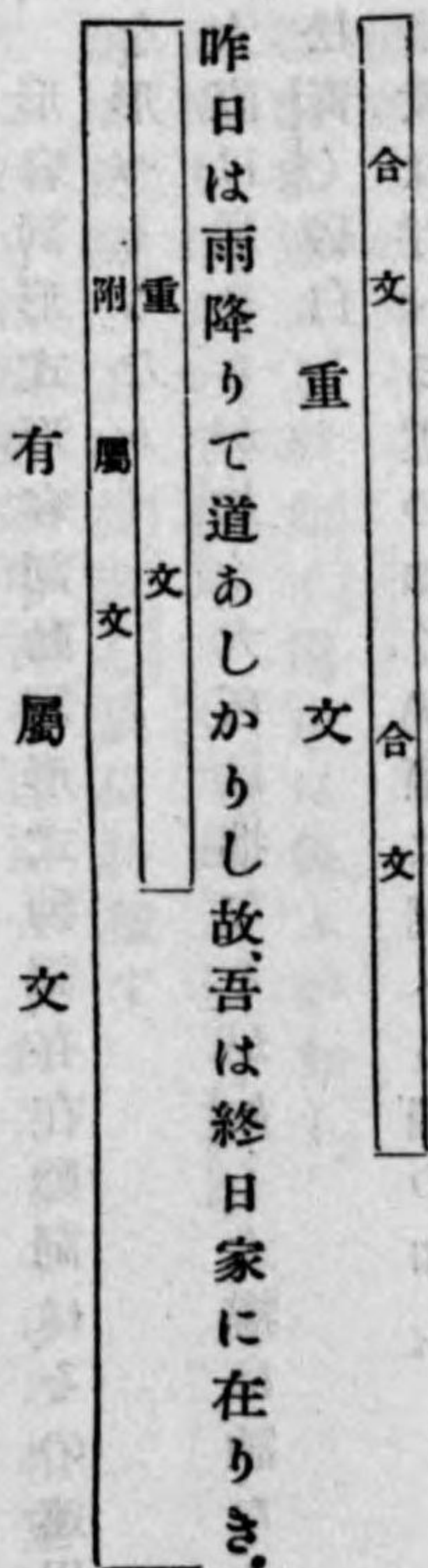
Satzverbindung 對語文章

Satzgefüge 附結文章

の二として吾人の重文及合文をば對結文章とし吾人の所謂有屬文をば附結文章として明に區別せり今吾人の合文と重文とを合一して一となすことをさておきて論ずるときは獨逸文典の方遙に合理的にしてしかも明瞭なり而獨逸文法にては吾人の重文と合文とにあたる者は共に接續詞にて結合せられそのさまも相似たれば之を一括して説明する方寧利ありといふべししかれども吾が文にありて重文は用言をば連用形になして述語となし合文は接續助詞を添へてつゞくるものなれば之を區別する方意義の上よりいふも形の上よりいふも共に妥當なりとすこの故にこれをたてゝ一類となすなり。

複文は又種々に結合せらる重文の成分に合文の存するあり有屬文と重文とが合文となるあり或は一の有屬文が更に他の有屬文の屬文たることあり千狀萬態

一々端倪しうべきにあらずかゝる錯綜したる構造を有せるものもその本性はなほ最後の組織によりて重文合文有屬文などと稱すべし今一例をあぐ。形病めば心も病み形盡くれば心も盡く。



これらのうち修辭上の必要よりして類似の語法にてリズム的に排列したるものありかくの如きものを對句と稱することあれど文法上の主要問題にあらず。

(一) 重文

重文とは二個以上の句を行文の便宜よりして相並列せしめて一體の文の形を有せしめたるものをいふ而その構成要素たる句は意義上互に獨立して相對的價値を有するものを形體上連結したるものなりさればこの重ねられたる句は唯時間上空間上若くは思想上の接近を除きては更に何等の交渉する所なきなり。

一 重文の構成

重文を構成するには上にある句の述語の形を連用形となして下の句に冠するを以て足れりとす。而句の終末が用言ならぬ時は之を重ねることあたはず。かくて上なるをば上句と稱し、下なるをば下句と稱すべし。

上にいひし如く、重文は意義上獨立せる句を形體上連結せるものなるが故に意義の上に深き關係あることなし。然れども上句と下句との間には些少の差なきにあらず。即上句は下句に比して、時間上、空間上、或は思想上前なるか稍重きをおきたるかの別あるなり。これ些細の事の如くなれど忽にすべからず。

形體上重文の組織せらるゝ方法を見るに多少の異同あるを以て次に例をあげて説明せむ。

一、形容詞、形式形容詞、動詞、形式動詞、存在動詞は、その連用形を以て重文の上句を形づくるなり。

大直は屈せるが如く、大巧は拙なるが如く、大辯は訥なるが如し。

松青く砂白し。

富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し。

遠山は笑ふが如く、近山は迎ふるが如し。

雨ふりいで、風加はり、神鳴りはためく。
圖らざるに牛は死し、圖らざるに主は存す。

農は耕種し、工は製造し、商は交易す。
花の咲くもあり、實のなれるもあり。
すべてこれらはその句を上下にして重ねることもうるなり。たとへば次の如し。

砂白く松青し。

近山は迎ふるが如く、遠山は笑ふが如し。

神鳴りはためき、雨ふりいで、風加はる。

商は交易し、工は製造し、農は耕種す。

さて、これらは同趣の用言を述語としたるもののみ相重ねとはかぎらず。

山は青く野は緑なり。

志堅く、望高く、才亦之に伴ふ。

そこに些の混雑なく、そこに些の喧嘩を見ず。

慾深き人はその心いつも貧しく、慾なき人はその心いつも富めり。

説明動詞にてなれるものは重文をなすに種々の姿あり。先その連用形を以てするものあり。

舜も人なり、我も人なり。

君君たり、臣臣たり。

その「なり」「たり」にして「と」してをかへて示すことあり。

天地たゞ平和にして、四顧たゞ寂莫たり。
水淼茫として舟搖々たり。

このうちの「にして」は更に略せられて「にて」となり、以て重文の上句を形づくることあり。

春の夜は曇がちにて、朧月おほし。

頭は人にて身は魚なり。

又「なり」はその「あり」を全く省き去りにのみにて重文の上句の述語を擔當することあり。

桃紅に、柳緑に、春の風ゆるやかに吹く。

風さわやかに、氣清し。

我が國は山水明媚に、氣候温和なり。

次にはその「なり」をば全く省きて資格の語のみにて重文の上句の述語を受持つことあり。

孔子名は丘にして、孔子はその尊稱なり。

天氣また清朗にして、風おもむろに四方の眺望はじめの如くなりぬ。

形容動詞動作存在動詞は其の連用形を以て重文の上句の述語となすことなし。この故にこの種の用言を以て述語とせる句を重ねるときは「あり」を除きたる語の

連用形になほして重ねるなり。

この間の眺め、東京附近と更にかはるところなく、別に目を惹くものなからむ。人丸は、赤人が上に立たむこと難く、赤人は人丸が下に立たむこと難くなむありける。

櫻の花はさき、梅の花は散れり。

富士山高く懸り、浮島が原廣く横れり。

春風は枝より枝を吹き、鶯は木より木に鳴き渡れり。

兄は書を読み、弟は字を習へり。

渚こぐ船は波に漂ひ、路行く駒は足の立處をまどはせり。

動作存在動詞形容詞を述語とせるものを重ねる時は必この例の如くせざるべからず。されど、この例の如きものは、皆かくの如き手續によりて生じたるものとはいふべからず。即尋常の動詞形容詞を上句の述語とし動作存在動詞形容詞を下句の述語となせるものなしとは限らざればなり。但こゝにあげたるは殆皆こゝに説ける場合のものといひて可なり。

複語尾にしてその連用形を以て重文の上句の述語を形づくりうるものは「れ」「ら」「せ」「おせ」「しめ」「以上屬性の作用を助くるもの」「て」「す」「べく」「まじく」(以上統覺の運用を助くるもの)なり。

野は細流に截られ街は水に夾まる。

(イ)頼朝は二弟をして平氏を攻めしめ、己は鎌倉に止れり。

(ロ)忽ち螺をふき立てさせ、主従僅に六騎にて出陣せり。

潮は手に満ちて泡さへも見えず、音さへも聞えず。

忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫に見えず。

(ハ)凡そかくべき事柄ありて而して後文章を生ず、

その量欽すべく、その徳仰ぐべし。

(ニ)この事は君も承諾すまじく、余も亦君に勸めず、

すべてかくの如く重文の上句を形づくりうる複語尾はたとへ前後同種類なり

とも、其の複語尾は省略せざるなり。上に(イ)(ロ)(ハ)(ニ)と符號を附せるものは上下、異

なる語法をとれるものの例にしてそれらの複語尾を除けば、意義全く變更するに

至るべし。これと同じくその他のもものを除き去ること能はざるなり。今若

をば、忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫に見えず。

とする時は決して始の例の如き意義をあらはさざるなり。しかるになほ之を重ぬ

る際に省略すべしといふは不可なり。

「むり」べかり「まじかり」の類は、それが重文の上句の述語となる時には「あり」を除きたる
残餘すなはち「す」べく「まじく」にてその用をなす。

雨もふらず、風も吹かざりき。

花も咲くべく、鳥もなくべからむ。

又その「あり」の代りに「して」を加へて次の如く用ゐることあり。

山も海も皆暮れ、夜更けて西東も見えずして、天氣の事楫取の心にまかせつ。

さてこゝにあげたる「すして」と同じ用をなすものは「で」なり。

櫻ちる木の下かせは寒からで、空に知られぬ雪ぞふりける。

連用形を有せざる複語尾「まし」「じ」「き」「けむ」「らむ」「らし」及連用形ありても重文に
使用せざる複語尾「たり」「けり」「めり」等を述語に有せるものは之を重ぬる時は上句に
於いて之をけづり、動詞の連用形を以て重ぬるなり。

運ある者は運の結果をうけ、働ある者は働を得む。

紀信は高祖の命に代り、義光は親王の爲に死にき。

雨ふり、風ふきぬ。

智識は名目のみに留まり、道德は空文の上にもみ貴ばれたり。

折りしも北風雨を吹き、寒さは肌をつんざきけり。

一重は散り、八重はうつろひぬ。

今上の例につきて上句の下句に對する關係如何と見れば、上句と下句と同様の形式をとること能はざるによりてかくなれるものにして、この場合には上句は意義上、下句に同じく必下の句と同じき複語尾を有して次の如くなるなり。

一重の櫻は散りぬ。八重はうつろひぬ。

かく一方に複語尾を有して、一方に省くは實は止むを得ざるに出でしなり。さるはこの「ぬ」といふ複語尾には連用形の上にかく重文をなしうる用法なきが故なり。すべてかゝる種類の複語尾はかゝる際には皆省かれて用言の本幹の連用形にて重ぬる外には、たゞそのまゝ重ぬるなり。その時は重文とはいふべからず。重文の用をなしえぬ複語尾は別としてその他のものは重文をなす際には決して省き去ることをえず。たとへば、

その智には及ぶべくその愚には及ぶべからず。

の「べく」をば省きて

その智には及び、その愚には及ぶべからず。

とすれば原の文とは意義かはり、又元より上句に「べし」のなき重文次の如きもの、

船子どもは腹鼓をうちて、海をさへ驚して、浪をもたてつべし。
船子どもは腹鼓をうつべく海をさへ驚すべく浪をもたてつべし。

とすべきにあらぬなり。なほ

行樹は烈風に倒され、道路は暴雨に毀たれぬ。

なども決してその複語尾の除き去られうべきものならざるに注意すべし。

すべて用言の連用形にて重文の上句の述語たるものをば、更に確述の複語尾、つゝの連用形、てをそへて、その結合を緊くすることあり。この時には時間的には稍前後せる如き關係を有せるもの又は思想的に特に密接せる意をあらはすなり。かゝる事の生ずるは、つゝに確むる意あるより來るなり。次の例を見よ。

春過ぎて夏來るらし。

月さえて雁高く飛ぶ。

山寺の鐘遠く聞えて秋の日は山の端に入りぬ。

任重くして道遠し。

鎧堅くして矢も通らず。

又數多の句を以て構成せられたる時は、その中特に密接なる關係を有する句をば他と區別を立て、又は同趣の句を一に集めて連結する場合あり。たとへば、

上は下を愛し下は上を敬して上下の和諧始めて整ふ。
月さえて雁高く飛び、風清くして夜靜なり。
守る人もなくて家は荒れ、住む人もなくて里は亡びぬ。

又かゝる時の上句と下句との間に係助詞は入ることあり。

いらか破れては霧不斷の香を焚きとぼそ落ちては月常住の燈を掲ぐ。

氣霽れては風新柳の髪を梳り氷消えては波舊苔の髻を洗ふ。

かゝる時に必_てのあらはるゝものにして助詞もはの外は附屬せず。これ實に_ての

確定的の意義なるとは_はの判定的の意義なるとの特徴をあらはせるものなり。

重文にありては上句と下句との意義上の連絡を或は圓滑にし、或は緊密にせむ

が爲に下句の上に接續語を置くことあり。

天下の人々すはや蒙古寄せ來らむと待設け、又かしこくも時の帝石清水の神

に祈り給ひ云々。

よのつねの人はあやまちて後改め難きになやみ、又はさすがに人めを耻づる

によりておし隠す。

若し其の事義に協はず、或は力及ばずば始めより約を結ぶべからず。

志堅く且望遠し。

酒あり又肴あり。

書をよみさて字を習ふ。

人々歌を詠し、或は詩を賦す。

以上に例としてあげたる重文は上句下句共に叙述體の者のみなれど重文はこ

の如きものに限るにあらず。先かくの如きは叙述の重文と稱すべきものなるべし。

重文の上句はいつも叙述體のもののみにして喚體又は命令體はかくの如き形

を呈することなし。されど下句は喚體若くは命令體たることあり。かゝる時には、そ

の下句の性質によりて喚體の重文若くは命令體の重文と稱すべきものなり。

喚體の重文の例

秋はぎをしからみふせてなくしかの目にはみえず、音のさやけさ。

咲く花に思ひつく身のあぢきなさ、身にいたつきのしるもしらず。

命令體の重文の例

甲は行き乙は止まれ。

汚れたるはすて、清きのみをとれ。

汝等のうち一人は残り、餘のものは皆來れ。

知れるを知れりとし、知らざるを知らずとせよ。

從屬の組織によれる同格の主語を有する句が重文なる時には、その從屬の部分

のみにて重文をなしその文全體の同格主格として主たる部分を冠することあり。

舞子のあたり松青く砂白し。

東京の都は面積廣く人口多し。

薔薇の花は色美しくして香高し。

鬼薨名のみことくくして花はおくれたり。
汝等のうち一人は残り、餘のものは皆來れ。

重文は文全體の修飾語として感應の修飾語を伴ふことあり。

あはれ我が友は失せ我が運命はきはまりぬ。

あはれ風烈しく吹き雷さへ加はりぬ。

重文は又その他の複文を以てなしうるものなり。

合文を以て重文をなせる例

月もみつればかけ人も奢れば衰ふ。

春來れども花咲かず秋過ぐれども葉落ちず。

樹靜ならんと欲すれども風止まず、子養はんと欲すれども親またず。

形病めば心も病み形つくれば心も盡く。

有屬文を以て重文をなせる例

慾深き人はその心いつも貧しく、慾なき人はその心いつも富めり。

牛の飲む水は乳となり蛇の飲む水は毒となる。

二 重文の排列照應省略

重文の排列は上句は上にありて下句が下にあることは勿論ながら之を轉倒し

たるものありたとへば、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして。

ありときく音羽の山のはとゞぎす何かくるらむなく聲はして。

けふみれば玉のうてなもなかりけりあやめの草のいほりのみして。

ひとりのみながめてちりぬ梅花しるばかりなる人はとひこで。

此里にたびねしぬべしさくら花ちりのまがひに家路わすれて。

かく轉倒したる時は上句は必_てを伴へり。

重文は單に二個の句の重ねらるゝのみにあらずして數個の句の相重ねらるゝ

ことあり。この場合に_{ては}たと_も同等に重ねるのみのものと一の重文を更に重ねた

るものとあり。次に例をあぐ。

同等に重ねたるもの例

田地年々に荒れ、都會の遊民は月々に多くなり、世間自然に困窮に及び、奴婢の

給銀も昔とは以ての外に高料になりて、その働きは前々の十分の一にも及ばざ

る事なり。

重文を更に重ねたる例

山も海も皆暮れ夜更けて西東も見えずして天氣の事かちとりの心にまかせ

つ。

雨降り出で風加はり神鳴りはためく。

所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに白く、貝の色は蘇枋にて、五色に今一色ぞ足らぬ。

すべて同一列の重文に於いて同一の單語が屢あらはるゝ時には文を簡潔になさむが爲に之を省くことあり、その場合を次にあらはす。

主語ならぬ他の語が屢くりかへさるゝ煩を厭ひて、其の存在の認めえらるゝ限りは一たびあらはれたるのみにて他は之を省くことあり、かくて體言は上句に存して下句に省き、用言は上句に省きて下句に存すること多しとす。

一重の櫻は散り八重の櫻はうつろひぬ。

あし引の山時鳥の聲の聞えぬのみならず、大かた鳥の聲も聞えず。

繪は巨勢のあふみ(かき)手は紀の貫之かけり。(源、繪合)

敷物には紫地のからの錦を用ゐ、うちしきはえび染のからの綺なり。(源、繪合)

すべて重文に於いては同一の主語ならでは其の主語の一を存し他を略することなし、但主語が説者自身なる時は此の限にあらず、この故に、

或夜盗人家に忍び入り、財物を多く盗まれたり。
の如きは必然的に

盗人が人家に忍び入りて、盗人が財物を多く盗まれたり。

の義となる滑稽を生ずべし、かゝる際の主語は決して省略しうるものにあらず。

世にはこの重文は同主なれ、同時に作用の態度も同一なれといへる論者あり、然れどもかくの如きは修辭學上の論ならばいざ知らず文法上更に何等の價値なき論なり、見よ

鳥なき花さく。

春すぎて夏來る。

本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴とびかふ。

の如きは論なく、

甲は乙を斫り、乙は甲に斫らる。

父は子に學ばしめ、子は師に學びたり。

にても何等の不條理なることなし。

重文の上句中に係助詞ある時はこの助詞の勢力は連用形に吸収せられて、下句に及ぶことなし、こは頗注意すべきことなり、なほ合文の條を参照すべきなり。

かへる山何ぞはありて有るかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ。(大和物語)

云々となんよみてしにけり。
みゆきとかよにはふらせて今はたゞこするの櫻ちらすなりけり。

この例の如く曲調を起す勢力は「て」にて止められたるなり。又「て」なくてもかゝるものあり。されど、これらは例多からず。

たぐひなかりし御氣色こそつらきしもわすれがたういかに人見奉りけむ。
(源 胡蝶)

(二) 合文

合文とは二個の對等的價値を有する句を以て更に大なる思想をあらはす要素として結合して個體となしたるものなり。かく連結したる句は形體上相連合せるのみならず意義の上にも頗密接の關係を有し、原句のいづれにもあらずして二者の合同によりてあらはされたる首尾照應ある思想をなせり。即ち一は他に對しての前行條件又は前行事實となり、一は之に對して何等かの關係をあらはせるものなり。

一 合文の構成

合文の要素たる二句のうち前行條件又は前行事實をあらはせるものを伴句と稱し、伴句に對してその歸結となるものを主句といふ。主句と伴句とは意義上頗密接なれども形體は唯助詞によりて結合せらるゝに止まり、各句はこの接續を除く

外は更に互に形式上に影響をなさず。

合文はその伴句の種類によりて二に分つ。一は喚體の句を伴句とするものにして、一は述體句を伴句とするものなり。

喚體句を伴句とするものはその伴句の下に格助詞の「間投助詞」を加へて、之を主句につゞくるなり。

なつかしくやはらかなるものいとめづらかに面白し。

君來むと言ひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬもの戀ひつゝぞ經る。

うつせみの世の人ごとのしげければ、忘れぬもののかれぬべらなり。

さはいふものゝ一概に然るにも非ず。

愁ともしきりなるものをなど遅くは參りつるぞ。

たちぬはぬ衣著し人も無きものをなに山姫の布さらすらむ。

直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵を言ふがわりなさ。

雲の上は變りにけりとさくものを見し世に似たる夜半の月かな。

吾らは約束の如く彼處にて待ちしものを汝はなどて來ざりしぞ。

これらは「もの」にて結體せられたる喚體の句をば、「を」にて下の句につゞけて一體

たらしめたるものにて、即合文の一體を形づくれるものなり。

從來の研究によればかくの如きものは、大抵の文法家に放棄せられてありしな

り、たまたま之に注目せしものも、ものをを以て助詞と稱し、又は感動詞と稱して、その上に溯りて何等の研究を施すとなし。かの放棄して顧みざるものと五十歩百歩の差のみ。今これらが感動詞又は助詞たることを承認すとしても、なほ重大なる要點は他に存せり。即これが、句論上の位地如何といふことなり。この説明立たざる以上は殆何等の利益も價值もあらざるなり。

先みよ。この「は」は即上に喚體句の成立をとける際にすでにとけるものにして之によりて喚體の句を成立せしむるものなり。次に「の」を「は」これ即助詞にして、これによりて或は感動の意を寓し、又は下につゞくるなり。「の」は體言を下につゞくる性質のものなれば、喚體句を下につゞくるに適する性質のものなり。「を」は感動を寓するを主とするものなれど、これによりて下の句との結合をなせれば、これを以て合文をなせるなり。かくの如くにしてはじめて、これらの文の構成は明になれるにはあらざるか。

叙述體の句に附屬して合文をなすは接續助詞なり。この種の助詞接する時は伴句の述語に形體上の變化を起す。而、その間に一定の法則あり。合文の主要なるものは、すべてこの種の伴句を伴ふものなれば、次にはその助詞を主として説くべし。「ば」は伴句を以て主句の條件とするなり。これに二様の別あり。即用言の未然形をうけて下につゞくものと已然形をうけて下につゞくものとなり。

其未然形をうけて下につゞくるものは次の如し。

明日天氣だによくば門出せむ。

暴風吹き起りて膚を劈くが如き患なくばこれまことに僥倖のみ。

道知らば尋ねも行かむ。

花さかばつげむ。

雨止まずば人を訪はじ。

命だに心になふものならば何かわかれのかなしからまし。ふまじのふまじ。すべてを用言の未然形を有するものには皆附屬してこれを伴句たらしめうるなり。

この未然形より「ば」につゞきたる伴句は主句に對して假設の條件となるなり。この故にその事實はいづこまでも現實のものとして説けるにあらざるなり。即ある條件を假定して、之によりて、その歸結たるものをとかむとする勢を示すなり。之を未然なりとか、未定なりとかいふは、言語の不明なるが爲に誤解を生ずる惧あり。假設の條件なることに注意すべし。こゝに假設といふは未然の事とか未定の事とかいふ如く事實に根據をおきていふにあらざるなり。從來之れを事實に根據を置き、未定の事柄又は未然の事件などいふによりて曖昧なる感を懐かしめしなり。假設といふは現に事實がしかありとも、しかあらずとも更に關する所にあらずして

たゞ思想内に假設したる一種の状態なり。わが思想に一の條件を假設したるなり。されば草野氏の引例の如く。

鶯の谷よりいづる聲なくば春くることを誰か知らまし。
世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心は長閑からまし。

にありては事實よりいへば鶯の現になけるを見櫻の現にさけるを見ての歌なるは、いはでもしるべきなり。即事實に根據をおきての事とせば、これらは當然既定の事をいへるなり。これを未定なりといはば事實と齟齬するなり。勿論未然未定の事實なるもあるべけれどこれらの精神はいづくまでも未定の事實をあらはすにても未然の事實をあらはすにてもなきなり。現に事實なりとも又非現實なりともこの假設にありては關する所にあらず。若然あらばと假設してそを一種の條件として次なる思想を呼び起すものなり。この故にこれらは皆假りにかくと定めて考ふればとの義にて其の意を了解しつべきなり。かへすくも之を事實的に説くべきにあらず。この場合の伴句と主句との思想上の關係につきては從來殆すべての學者の誤解せる點なりしが故草野氏の説頗明晰に之を斷せられたれば左に之を摘出す。

サレバ承クル「ば」ニテ上文ニ假設豫定等ノ意ヲ含メタル時ハ其ニ接スル文ハ推量決定命令禁止斷定ノ意ヲ有スル助動詞ヲ添フベキナリ例ヘバ、

風吹かば波立たむ……………風が吹くならば波が立たう。推量

君行かば我も行かむ……………君が行くならば我も行かう。決定

行かむと思はば行け……………行かうと思ふならば行け。命令

悪しと知らば爲な……………悪いと知つて居るならば爲るな。禁止

英米の二國開戦すとの風説あり。もし事實ならば一大事なり……………英米の二

國が開戦するといふ風説がある。もし事實ならば一大事なり。……斷定

ノ如シ。此等ハ上ニ假設ノ意ヲ承ケ、之ニ相應シテ意義上毫モ矛盾セザル文ヲ下ニ絡ギタル故ニ全文ノ意義能ク通徹ス。コノ推量決定ノ意ヲ示ス「ば」ヲ未來ノ「ト」混同シ、隨ツテ未來ノ文ハ未來ニテ承クベシトイフ説ヲ唱フル人多シ。思ヒ誤ル事ナカレ。又此等ノ説ヲ有スル學者ノ最モ忌ムハ、もし事實ならば一大事なりノ類ノ文ナリ。之ヲ「一大事ならむ」トシ未來ニ直スベシトノ説ハ一理アル如ク聞ユレドモ、「一大事ならむ」トイフ時ハ其意ハ明ニ推量ナリ。未來トハイヒ難カラン。サレド推量ニ及バズ、明ニ一大事タルニ相違ナキ意ヲ著ハスニハ「なり」トセザルヲ得ザルナリ。之ヲ不可ナリトイフハ誤解ヨリ起レル文ノ形式ニ依テ人ノ思想ヲ左右セントスルナリ。況ンヤ假リニ事ヲ設ケ之ニ就テ斷定ヲ下シ試ムル事日常甚タ多キニ於イテヤ。

(未來の「ば」といふものなし。氏は如何なるものをいへるか訝し。)

げに氏の説の如く吾人はある事を思想内に於いて假設して、この假設によりて生ずる當然の結果を斷案として明言することは明白なる事實なり。

用言の已然形をばに接せしめてつくれる伴句はなほ主句に對して條件を示すなり。然れども、其の條件は假設にあらずして實有の事實なるか又は承認せられたる條件なるを示すなり。

天氣よければ我行く。

風吹けば波立つ。

月を見れば心澄む。

太陽西の方に沈めば雲は金色の色して輝く。

泰山木の花咲きたれば來りみよ。

花さきたれば人の心ものどけからず。

雨止まねば人を訪はず。

この數例に於ける伴句は皆主句の前行條件なること明なり。而其の條件は共に現實存在するか又假令其の事實が現存することにつきては疑はしとて之を一の確定したる條件と見たるときはなほこの語法に従ひて伴句をつくるなり。

水至りて清ければ大魚棲ます。

人多ければ天に勝つ。

これらにありては現實ならぬ事實なることをいふに用ゐたるなり。即一般の場合を確認して之を條件としたるなり。決して既定とか已然とかいふ如き現在の事實を根底としたるにあらず。これ即上の假設條件に對して確説實有の條件をあげたるまでなり。之を明晰にしたるものは吾人の見る所にてはなほ故草野氏の外になきなり。

即この種の條件は其が一定の事情の下に生起することの確然不動なることを認むればそれが事實ならでもなほこの種の語法に従ふことをうるなり。たとへば、

老いぬればさらぬわかれのありといへばいよく見まくほしき君かな。

の文にありて、

老いぬればさらぬわかれのありといふ。見まくほしき君かな。

さらぬわかれのありといへばいよく見まくほしき君かな。

この二の前行條件は共に現に老いてあるが故にいふとかぎらずして「老ゆ」といふ事實を實有として之が後件として「さらぬわかれ」が「あり」といふにてこの「あり」も亦實有の狀況を述べたるにて現に存在すといふが如き意にあらぬなり。従つてこゝにては原因又は理由を示す意にも用ゐらるゝなり。この條件の實有假設の區別は頗注意すべきことなるに從來甚粗雑にして間誤謬をさへ傳へたりしが故草野氏に至りてその説確立したり。

「と」「ども」「ど」「ども」にて接続せしめられたる伴句は主句に對して、反對に立てる條件を示すなり。

さてこの助詞は「ば」の順續條件に相對的關係を有して、反對的關係を示す、而、その「と」「ども」は「ば」の假設條件なるものに對して、反對を引起すべき假設條件を示し、「ど」「ども」は「ば」の實有條件なるに對して、反對を引起せる實有條件を示すなり。この故にこの接續上の意義はかの「ば」の準じて心得べきなり。「と」「ども」は用言の種類によりて、それが附屬する活用形を異にす、即形容詞形式形容詞及それらと似たる複語尾には未然形に附屬し、その他のものには原形に附屬す。

かたちはみにくくとも心はうるはしからむ。

よせくる敵はつよくとも恐れすすめや日本男子。

たとひ屍を戰場に曝すとも名を子孫に傳へむ。

人は見ると我は見じ。

住吉とあまはつぐとも永居すな。

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。

嵐のみ吹くめる宿に花すき穂に出でたりとかひや無からむ。

の如く伴句は主句に對して反對的關係を有する假設たるなり、これも亦未定など

いふべきものにあらざるなり、即最初の例にていはば、かたちは未醜からざるにあらで現にみにくくありともこの語法をなすには更に障礙を感せざるなり、其の他みな然り、現に然ると然らぬとは關知する所にあらざるなり。

「ど」「ども」は已然形に接して伴句をなす。

この間に事多けれどかゝす。

春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ。

人は美德を天に稟くれども後天の氣質によりて之を完うすること能はざるもの多し。

あやしき下藤なれども聖人のいましめになへり。

春はきしかど風なほ寒し。

古にありきあらずは知らねども千歳のためし君にはじめむ。

これらは又「ば」の確定の條件なるもの、如く確定の條件が主句に對して反對的關係に立てる場合をさすに用ゐらるゝなり、これも亦既定などいふべきにあらず、たとへば最後の例を見よ、いにしへにありきあらずは知らねども「は知らず」といふ事が既に定まりたるにあらずしてありともあらずとも問ふ處にあらずと斷言せるのみなるは明ならむ。事實の前提は「が」「に」「を」にて示す、これらは伴句の述語を連體形としたるものを

うけて主句につづく。

香頼光といふ人ありけるが誠まことに人にすぐれたる豪たけなほの者なりけり。

父は屢しばしば説諭しやくごしたりしが彼は遂ついににきかざりき。

藤房の卿は中納言までなり給ひしが建武甲戌の年の春俄たちまちに世をすて給ひき。

路のほど如何あらむと案じたりしが誠まことに安らかなりき。

庭の面はまだかわかぬに、夕立の空さりげなくすめる月かな。

日くれかゝるに、やどる家もなし。

雪とのみふるだにあるを、櫻花いかにちれとか風のふくらむ。

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを、雲のいづこに月やどるらむ。

さゞ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな。

この「が」「に」「を」にて接続したる文は伴句と主句との間に合同的の事實又は思想たる關係あるを示すなり。而、伴句は條件にあらずして實際の事實又は思想なり。即主句と伴句とは共に事實又は思想として實際に存在せる伴生的の事實又は思想たることを示す。しかもその事實と事實若しくは思想との間又は思想若しくは事實と事實との間の關係が普通の思想にては同伴を生すべき勢なるに之に反對の事實を生じたることをあらはすに用ゐたるもあり。之を附屬句の準體句と混同せざらむことに注意すべきなり。かれは體言と同等の資格を有して文中にありて主語補

語等の資格に立つが故に「が」「に」「を」を伴へるものなり。

すべて合文にありては、伴句は主句に對しては多少相伴的のものなりといへども、決して附屬的のものならず。この伴句と主句とは相合してこゝに渾然たる一の思想を發生したるものにして、この點より見れば、相對的價値を有す。伴句なくば、主句は合文の成分なることの資格なく、主句なくば伴句は唯の單文にすぎざるべし。この故に二者は對等の資格を有す。しかも重文の如く獨立の資格を有せるにあらで相保合せるものなり。これをたとへば、生物の細胞の如し。決して一は一に從屬せるにもあらず、又個別に立てるにもあらず。さりとて二者の合計にもあらず、即二者の混一せる一思想なり。この故に二者は有機的結合をなせる一體なり。これを數學的の式の形をかりて示す時は重文と合文とは次の如き差異を見る。

(形體上)上句 + 下句 || 重文。

(意義上)伴句 × 主句 || 合文。

然るに世にはこの伴句を以て附屬句なるかの如く説けるものあり。これ甚しき誤謬なり。伴句は決して一の用言の屬性を修飾するが如き意義の狭きものにはあらざるなり。

この種の合文の伴句たるものは必叙述體のものなるべきは上にのべたり。而、主句は叙述體にかぎらず、命令體の句にても喚體の句にてもなりうべし。次に少しく

例をあぐ。

喚體を主とする合文の例。

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨

遠くあればわびてもあるを里近くありときつゝ見ぬがすべなき。

下にこそ人の心もうつろふを色に見せたる山櫻かな。

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな。

郭公一こゑとこそ思ひしにまちえてかはる我心かな。

かくまでとは思はざりしをさても殊勝なる少年かな。

早き瀬にみるめおひせば我袖の涙の川にうゑましものを。

(な)となく物ぞかなしき詠むればあなあぢきな月の光や。

さらぬだに草の枕は露けきに涙すゝむるむしのこゑく。

命令體を主とする合文の例。

夜啼すとたゞもりたてよ。

ちりぬともかをだにのこせ梅の花。

若汝之を欲せば汝の要するまゝにせよ。

今は野邊に屍を晒さば晒せ蒼海の底にも沈まば沈め、
よせくる敵はつよくとも恐れず進めや日本男子。

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

つゆも物空に翔らばふと射殺したまへ。

泰山木の花咲きたれば來り見よ。

國王の仰せごとを背かばはや殺したまひてよかし。

風雨烈しくとも必ずこよ。

風雨烈しけれども必ゆけ。

叙述體を主とする合文の例。

さほ山の柞の色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな。

春は來しが花はまだ咲かず。

鶯の谷よりいづる聲なくば春くる事を誰かしらまし。

こは面白き事なれどもあまりに耽るな。

大和撫子さまくゝに各がむきくゝ咲きぬともおほしたててし父母の庭の教

にたがふなよ。

合文の複雑なるものにおいて主句に對して二以上の伴句あることあり、この時、その伴句相互の關係は種々なり、即並立組織によるものあり、一致組織によるものあり、從屬組織によるものあり、次に少しく例をあげて説かむ。

並立組織によるもの。

秋萩を色どる風はふきぬとも心はかれじ草葉ならねば。
雨は降りたれど春の日數も残りすくなになりたれば花見に出で立ちぬ。
大宮はこゝときけども大殿はこゝといへども霞たつ春日のきれる云々。
一致組織によるもの。

春は來たれど櫻のまださかねば人の心ものどけからず。
唐土とこの國とは詞異なるものなれど月の影は同じ事なるべければ人の心も同じ事にやあらむ。

姿は火にくへて焼きたりしかばめらくと焼けにし、かばかくやひめあひた
まはず。

吹く風は色も見えねど冬來れば獨ぬる夜の身にぞしみける。
從屬組織によるもの。

讀まむとすれど讀みかねしかば上聞に達しぬ。

支那は面積廣く人口多けれども上下一致せざれば國力强からず。

うめる子のやうにはあれどいと心はづかしげにおろかなるやうにいひければ
心のままにもえせず
又合文を以て主句の地位にたゞしむるものあり。
(竹取物語)

吾が行ひ道理にかなはず世にぞりて毀るとも懼るべからず。

ものをこそいはねど花も心あれば咲くべき程をすごしやはする。

世に久しくおはせばこそおのれなくとも大將の御ためにもたのもしうなら

め。
(宇、樓上、上)

相戦はむとすともかの國の人きなば猛き心つかふ人よもあらじ。

(竹取)

うたて何しにさ申しつらんと思へどもまた人のあらばこそはまぎれもせめ。

(枕草子十二)

主句の地位にも伴句の地位にも合文を用ゐたる例もあり。

停車場に行きけるに既に發車しけれどそのまゝかへるべきにあらねば暫く
まてり。
のちに男ありけれど子あるなかなりければこまかにこそあらねど時々もの
いひおこせけり。

(伊勢物語)

更に複雑に組織せられたるものあり。

人しげくもあらねどたび重りければ(合文にして伴句たり)あるじきゝつけて
そのかよひちに夜ごとに人をすゑて守らせければ(上の伴句を伴へる合文にし
て又伴句たり)いけどもえ逢はでかへりけり(合文にして全文の主たり)。

(伊勢物語)

合文の複雑なるものに至りては重文を以て之を構成すること少からず。先、重文を以て伴句の地位にたしむるものあり。

宿もあれ主もなければ、月のみぞすみか定めぬ廣澤の池。

須磨の浦は風景美にして、空氣清ければ避暑に適す。

合文の主句の地位に重文をたしめたるものあり。

山ふかみ都の方は霞めども氷もとけず鳥も來鳴かず。

秦時公家の御事を重くし、本所の領をとめしかば、風の前に塵なくして天下

即ちしづまりき。

出でて月邊に佇めば、月清く風涼し。

又主句にも伴句にも重文の形をなせるものあり。

風景美にして空氣清ければ、人も行き我も赴く。

合文はその文全體の副成分として呼格の語を伴ふことあり。

やよしぐれ物おもふ袖のなかりせば、木葉の後に何を染めまし。

花の色は霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春の山風。

從屬組織になれる同格語を伴ふものは、合文の上におかざるを常とす。

櫻花は香無けれども色艶なり。

賣藥は價廉なるが効能もうすし。

接續語を冒頭に有することあり。

されば申し請ふ所御承引なくして猶御院參あるべくば、只今重盛が頭をめさるべく候ふ。

二 合文の排列、照應、省略

合文の排列は伴句を上にし主句を下にするは勿論のことなるがまゝ、この排列を變更することあり。

この變更せる排列には伴句を下にして主句を上にしたるものあり。その例

にほひつゝ散りにし花ぞ思ほゆる、夏は緑の葉のみしければ。

のこりなくちるぞめでたき、櫻花ありて世の中はてのうければ。

山里は冬ぞさびしさまさりける、人も草もかれぬとおもへば。

君しるらめや、人しつげすば。

君がよは限りもあらし、長濱の眞砂の數はよみつくとも。

月見れば千々に物こそ悲しけれ、わがみ一の秋にはあらねど。

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてをゆかむ、さよはふくとも。

秋の野の錦のごとも見ゆるかな、色無き露はそめじとおもふに。

世をすつる心はなほぞなかりける、うきをうしとは思ひしれども。

秋萩を色どる風はふきぬとも心はかれじ、草葉ならねば。

君はまだ遠くはゆかじ、わが袖の涙の露のかわきはてねば。

露をなとあだなるものと思ひけむ、我が身も草におかぬばかりを。

今はよに山の木の葉もあらじかし、立田の河の色づく見れば。

又間、伴句が主句の中に介在せることもあり。

椎の木は常磐木はいづれもあるを、それしも葉かへせぬためしにいはれたる

をかし。

(大方は月をもめでじ、これぞこのつもれば)人の老となるもの。

合文にありても同一の語が屢反復せらるゝが如き場合には煩をいとひて之を

省略することあり、今之を例をあげて説明せむ。

(一) 馬は必ず人に乗らるべきものにて候へば、いかに猛き(馬)も人に従はぬ事や

候ふべき。

こは伴句の主語たるものと同じきものを主句にては連體語にまかせて體言を省

きたる例なり。

(二) 藤房卿は中納言までなり給ひしが、

(建武甲戌の年の春俄に世を捨て

給ひき。

こは伴句主句同じ主語なるを主句にて省きたるなり。

(三) つゆも物空に翔らばふと(その物を)射殺したまへ。

正成兵庫に著きければ新田左中將(正成に)對面したまふ。

こは伴句中の主語が主句中の補語となりたるものを省きたるなり。

(四) 孔子には斯く物問ひかくる人も無きに(孔子に)斯く(物を)問ひけるは云々。

こは伴句と主句と同一の補語ある場合に主句のうちものを省きたるなり。

以上の如く伴句中に存する語をば主句中には省くこと多し、されど、また、之に反

對なるものもなきにあらず。

(五) (鸚鵡は)他所の物なれど鸚鵡いとあはれなり。

こは伴句主句同じ主語なる時に伴句のを省きて主句にあらはしたるものなり。

(六) (やどり木は)その物ともなけれど、やどり木といふ名いとあはれなり。

こは伴句の主語が主句中にては連體語の補語なるものを伴句に於いて省き去り

たるものなり。

以上はすべて對象たる體言の省略せられたるものなるが述語たる用言はいづ

れにありても省くこと殆なし、これこれらの接續助詞は用言をまちて用をなすべ

きものなればなり、唯僅にこれあるは、をの接續の際に見るのみ。

(七) 白露の色は一つ(なる)をいかにして秋の木の葉をちゝに染むらむ。

秋の菊句ふ限りはかざしてむ花よりさきとしらぬ我が身(なる)を。

この時は賓格の語に直に「を」を接せしむるなり。
合文にありては、又まゝ、伴句を存して主句を略することあり。但そは「ば」にてのものに多く見ゆ。

いたづらに過ぐる月日をたなばたの逢夜の數とおもはましかば……
月影のいるを惜むもくるしきに西には山のなからましかば……
たなばたの逢夜の數のわびつゝもくる月毎の七日なりせば……
すがたこそねざめの床に見えずともちぎりし事のうつゝなりせば……
秋はぎにはへるわが裳われぬとも君が御船の綱しとりてば……
山のはのかゝらましかば……池水にいれども月はかくれざりけり。
而、引用せらるゝ時は最多し。

「笛の音の春面白くきこゆるは花ちりたりとふけば……なりけり。
「世の中にあらましかば……」と思ふ人なきが多くもなりにけるかな。
「いつしか出でさせ給はゞ……」などきこえさするに。

これらはこの伴句にて既に相當の主句の意を推測しうるを以てなり。主句を存して伴句を省き去るときは之を推定すること能はざるが故に伴句を略き去ることとはなし。

陳述の修飾語のうち伴句の修飾をなせるものあり。これも亦この合文の條に洩

すべきにあらず。

かゝる老法師の身にはたとひうれへ侍りとも何の悔か侍らむ。

秋の色は外山の峯の薄紅葉よしや時雨になほ染めずとも。

思ひ出でゝもしも尋ぬる人あらばありとないひそ定めなき世に。

このうち「たとひ」はいつにても伴句の修飾語たるものなり。「よしや」は放任をあらはす時にあらで假設をあらはす時に「もしも」疑念をあらはすにあらで假設をあらはす時にこの用法は生ずるなり。

すべて伴句中に存在する單語の勢力は決してその句以外に及ぶことなきなり。この故に陳述の修飾語の勢力もまた、係助詞の勢力も共に伴句の中なるはその伴句の中に限られ、主句のうちものはその主句のうちに限られてあるものなり。されば、伴句中に曲調を起しうべき助詞ありて勢力をその述語に及ぼしたりとて決して之に對する曲調は生ぜざるなり。

あひみてはなぐさむやとぞおもひしになごりしもこそ戀しかりけれ。

この「ぞ」に對して「思ひし」が結となりたるにさらに「に」を以て下へつづけたる様に玉の緒にいへれどもすべて終止の形を「に」にてうけたることなし。

したにこそ人の心もうつろふを色にみせたる山櫻かな。

こは玉の緒に「を」と結ぶ格とていだせるなり。これも亦接續によりて終止は存在せ

ぬなり。これら皆強ひて結を求めたる弊なり。

さてかの係結といふことはその文の形の上に於ける形式上の調和に止まるを以て、之が接続せられて合文となる時は其の勢力は接続助詞に吸収せられて決して結といふものは下の句にあらはるゝことなく、従つて文中にあらはるゝことなきものなり。之を轉結なりとか、結を轉ずとかいふ人あれど轉じもうつりもせず、唯終止法が接続法に變じたるまでのものなり。すべてかゝる論をなすものはみなかの係結に酔へるたぐひなるなり。

命をばあふにかふとかきししかどわれやためしにあはぬしにせむ。

あさましやなどかきたゆるもしほぐさこそはあまのすみかなりとも。

いにしへは月をのみこそながめしに。今は日をまつ我身なりけり。

信濃なるそのはらにこそあらねどもわがはきと今はたのまむ。

母なりし人は引放ちにくうぞ思ひたりしかども、こゝまでゐて來つるを、雪かとぞよそにみつれど、櫻花折りては似たる色なかりけり。

別納の方にぞ曹司などして人住むべかめれど、こなたは離れたり。

越前守今年なんかはりけれど、國の事いとよくなしたりければ、都人さこそ待つとも、郭公おなじみ山の友な忘れそ。

是こそ善惡の分るゝ所なれば、心を用ゐるべし。合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひいかゞあらむ。

珍らしき春もあすとぞきこゆれば、くれなん年をなにかをしまん。

物をこそいはねど、花も心あればさくべき程をすごしやはする。

郭公一こそとこそおもひしに、まちえてかはるわが心かな。

さて又係助詞が伴句と主句との中間に入りて合文の陳述を助くることあり。さる時にはこの係助詞は自然に伴句の下に附屬す。この係助詞を伴ひうべき伴句は順續條件を示す「ば」のみに限る。而して「は」「も」「な」は附屬することなく、「ぞ」「なむ」「こそ」「や」「か」の附屬するを見るなり。かゝる際には主句の述語に曲調を起すなり。

人をおもふ心、木の葉にあらばこそ風のまに／＼ちりも亂れぬ。
龍の首の玉をえ取らざりしかばなむ殿へもえ參らざりし。
天の川紅葉を橋にわたせばや、たなばたつめの秋をしもまつ。
夕さればはたるよりけにもゆれども光見ねばや、人のつれなき。
思ひつゝぬればや、人の見えつらむ、夢と知りせばさめざらましを。
ころもしもおほくあらなんとりかへてきなばや、君が面わすれたらむ。

秋の夜の千夜を一よになすらへて、八千夜しねばや、あく時のあらむ。
いかならむ岩ほの中にすまばかはよのうき事のきこえこざらむ。

古風の文にあつては確定的順續條件を示す語が純粹形式用言及その形なる複語尾ある時は「ば」を加へて、係助詞にて直に助けたることあり。その最も多きは「れや」なり。これ今の歌文にも多少は用ゐらるゝものなれば二三の例をあぐ。

水の上におふるさ月の浮草のうき事あれや、根をたえて來ぬ。

天の川冬は氷にとぢたれや、岩間にたぎつ音だにもせぬ。

里はあれて人は古りにし宿なれや、庭も籬も秋ののらなる。

さてこの伴句と主句との照應につきては從來の説頗るまどへるものあるに似たり。この故にこゝに之を論せむと欲す。

從來の説によれば或は同一の主語を有すべしといひ、或は同一の述法たるべしといへり。これ頗る迷へるにあらざるか。抑「と」とも「ど」とも「が」に「を」にて連ねられたる句は必同一の主語を有し同一の述法を有する句なるべき必然の約束なきなり。然るに、

左軍は勝ちたれども右軍は敗られたり。

の如き文は伴句は自己動作にして主句は被動作なるが故に同じ相を有せざるが故に不可なりといふ論あり。何の不可かあらむ。吾人はかくの如き文にて何の障礙

なしに理解しうるにあらすや、之を相を異にせるが故に不可なりとするは何の見
る所ありてかは知らねど、固陋の見解といはざるべからず、同相のものにても異相
のものにても之を其の前後の關係のゆるす限りは結合しても少しも差支なきは
吾人の常識之を認むるにあらすや、試みにこの文をとりて常識ある國人にとへ、十
人が中十人まで理解しえずといふものあるべしや。

すべてかの接續助詞にて連接せられたる文は其の伴句の意義によりて主句に
差異を生ずるものなればこの種の複文の照應といふことは所詮伴句と主句との
語法の相關といふことに歸すべし。この故に今は伴句を主題として之に應ずる主
句を論せむと欲す。

一、條件的前提の順續的なる伴句と戻續的なる伴句とに對する主句の差異。
順續的伴句に對する主句は陳述様式の上に於いて一致せるを通常の法則とす。
但事實に於いて反對する勢に立てる語を主句の述語に使用するときには反對の語
法をとりて意義の上に於いて一致せざるを法則とす。

月を見れば心澄む。月を見れば心すまむ。

雨やまねば人を訪はす。雨やめば人を訪ふ。

雨やまずば人を訪はじ。

道路あしければ今日は行くな。

心地あしければ物をいはぬなり。

水至りて清ければ大魚棲ます。

汝行かずば我行かむ。

所詮は伴句より生ずる當然の結果を以て主句とするものなれば、其の語法は制限あるべきにあらず。唯事實上反對の事情を以て主句とすることなしといふに止まらむなり。

戻續的伴句に對する主句は陳述様式の上に於いて反對したるものを以てするを通常の法則とす。但事實に於いて伴句の陳述に反對する意義の語を以て主句の述語とすることある時は陳述の方式に於いて一致せしむることあり。

人は見ると我は見じ。

忠告すとも其詮無かるべし。

難き物なりとも仰せごとに従ひて求めにまからむ。

住吉とあまはつぐとも永居すな。

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。

口惜しきこと多かれどえつくさず。

あやしき下蔭なれども聖人のいましめになかなへり。

さは山の柞の色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな。

思へども身をしわかねば目に見えぬ心を君にたぐひてぞやる。
春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふ。

順續戻續の區別より見たる伴句と主句との對照は以上の如し。

二、條件的前提の假設的なる伴句と確定的なる伴句とに對する主句の差異。
假設條件を前提として之が歸結となりうるものを考ふるに、今若その條件の成立するものとせば、之によりて斷案を下しうるは明なり。この故に斷案はこの主句となりうべし。その例。

月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり、またずしもあらず。

草がくれかれにし水はぬるくとも掬びし袖は今もかわかず。

みちのくにありといふなるなとり川なき名とりてばくるしかりけり。

折りとらば惜しげにもあるか、櫻花いざ宿かりて散るまではみむ。

山高くとも貴からず。

今日日曜ならば明日は月曜なり。

次に主句が動作状態をあらはすものならば其の動作は豫定せられたる動作、状態ならば推量せられたる状態ならざるべからず。

面白くば其よし物にかきつけむ。

雨止まずば人を訪はじ。

名にしおはいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと。

命だに心にかなふものならば何かわかれのかなしからまし。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし。

嵐のみ吹くめる宿に花薄穂に出たりとかひや無からむ。

限りなき雲居のよそに別るとも旅行く人をいつとか待たむ。

ちはやふる加茂の社の姫小松萬代經とも色はかはらじ。

の例、

悪しと知らばすな。

あふさかの關しまさしきものならばあかすわかるゝ君をとめよ。

彼行かば汝も行け。

彼行かすとも汝は行け。

進むとも退くな。

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。

住吉とあまはつぐとも長居すな。

確定条件を伴句として之が歸結をなす場合を考ふるに前行の確定条件を原因又は理由として共に對する結果又は現況を以て主句とするなり。この場合にては

主句は斷案ならざるべからず。

月を見れば心すむ。

雨止まねば人を訪はず。

野へ近く家居し居れば鶯の鳴くなる聲は朝なく聞く。

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける。

これが戻續なる時は所謂反對の原因といふものをなす。

我待たぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人は音づれもせず。

思へども身をし分かねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる。

風吹けど處も去らぬしら雲は世を経て落つる水にぞありける。

くらゐ山花をまつこそ久しけれ春のみやこに年はへしかど。

又單に相對的に存せる動作状態をいふことあり其の例。

さは山の柞の色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな。

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそおもへ。

萩の露玉にぬかむと取ればけぬ。

かみなびの三室の山を夜行けば錦たちきる心地こそすれ。

もろこしも夢にみしかば近かりき。

劃一の時間的發表をなすべきは自然の勢なり。

(一)まきむくの檜原もいまだくもらねば小松が原に沫雪ぞふる。

(二)天の川淺瀬しら浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける。

(三)官軍既に寄せ候ふと申しも果てねば先陣既にはせ來る。

これら皆同時に存在する二事件をいひたるなり。

一は 檜原のくもらぬ と 沫雪のふる と 同時なることを

二は わたりはてぬ と あけたる と 同時なることを

三は 申しはてぬ と 先陣のはせ來る と 同時なることをいひたる

にて何の異もなき事なるを古より頗めづらしきものの如くいひたるものなり。前例に比較してみよ、何のめづらしきことかあらむ。

今日の記載語にてもこの形は存するなり。

汝もしらねば我もしらす。 親類も喜べば知人も祝したり。

花もさかねば鳥もなかず。 登山もすれば海水浴もしたり。

承知もせねば断りもせず。 見もすればさきもす。

たゞこれらは、伴句の述語が必しも否説にあらぬに、上にあげたるものは否説なるによりて大差ある如く見ゆるに至りしなり。又確定條件をば現實の事實として、之を基本として將來の事實を豫期推測する

ことあるなり。かゝる時は主句は又不確定の語法をとるなり。

いにしへにありきあらずは知らねども千歳のためし君にはじめむ。

風は吹けども船は無事ならむ。

こゝにてだに風烈しければ海はさぞ波立たむ。

君は恩を施せども彼は其徳に報いじ。

容貌は美はしけれども心は悪しからむ。

風烈しければ今日の出帆は覺束なからむ。

君がゆくこしの白山しらねども雪のまに／＼あとはたづねむ。

をとめらが玉くしげなる玉ぐしのかみさびけむも、いもにあはずあれば、

雨ふれば來會者少からむ。

又この條件を前提として命令禁止をなすこともあるなり。

我も思ふふしあれば暫くまで。

道路悪ければ今日は行くな。

誠に氣の毒にはあれど、この事かくなし給へ。

こは面白き事なれどあまりに耽るな。

以上の如く伴句に對しての主句の意義は種々なれば、その意義に應じて陳述すべきものにして、くゞしき法則だては要用にあらぬなり。

次に事實前提も亦條件前提と同様にくだしき法則をたてうべきものにあらず、これらは皆伴句は現實又は過去の事實又は思想なるに對しての主句は事實又は疑訝なるべきなり、而之は必しも齟齬せる事實をあらはすにあらざることは既に第一部第三章に説きし所なれば今説かず。

(三) 有 屬 文

有屬文とはそのうちに附屬句を有する文をいふ、一の句が他の文の成分たる語の位格に立つときはこの獨立を奪はれたる句をば附屬句といふ、この有屬文と上の重文合文とは、二個以上の句の合成なる點に於いては相似たれども、彼は二の句が對等に互に結合せられたるにこれは一の句は他の句の成分たる語の資格に立たしめられたるなり、即從屬組織によれる複文たるなり。

一 有屬文の構成

有屬文は文中の一成成分を代表するに一の句を以てするものなれば、或は主格が附屬句たるあり、賓格が附屬句たるあり、補格が附屬句たるあり、連體格が附屬句たるあり、修飾格が附屬句たるあり。

主格たる附屬句

雁の空高く渡るも見ゆかし。

賓格たる附屬句

恐れをのくさま雀の鷹の巢に近づけるが如し。

補格たる附屬句

時雨の音一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して。

連體格たる附屬句

河原などには馬車の行き違ふ道だにもなし。

東西の市は人集まる所なり。

修飾格たる附屬句

君は餘念なく文章を起草し居られたり。

交聲たえずなげや鶯。

さてこれらの附屬句の分類をば英文典などの所説にならひて名詞句、形容詞句、副詞句などと別つ人もあれど、既に形容詞副詞などの區別の語の用法上の名目として不可なる上は何の根據もなきものなれば、今更之を用ゐるべくもあらず、又獨逸文典などにならひて、主語句、述語句、形容句、副詞句などいはむも未可ならず、この故に余は先この附屬句の區別につきて論せむ。

上にあげしは附屬句が如何なる位格をあらはすかの點より見たるものなるが
 次には附屬句が如何なる形をとるか點より觀察せむ。
 形體上附屬句を區別すれば、二種の別あることを知る。一は文として成立せる形
 のまゝ直に附屬句として取扱はるゝもの、二は句の述語の形を變更して附屬句た
 る用を果さしむるものなり。
 文として成立せる形式をそのまゝとりて附屬句の地位に立たしむるものはそ
 のまゝ體言の資格に立たしむるものと、といふ助詞にて補格に立たしめてさて
 用ゐるものとの二種あり。

「くる人なし」の宿の庭にも。

新院の御心中「おぼつかなし」とぞ人申しける。

かく形を變せず原文そのまゝなる附屬句をば特に引用句と名づくるなり。而、この
 種類の句は、一旦成立せるものなるが故にかの係助詞と終止との相關はこの句中
 には完全に行はるゝなり。
 句の述語の語尾を變更してはじめて附屬句たるものは二様あり。即述語を用言
 の連用形にするものと用言の連體形にするものとなり。
 述語の形を連用形になして附屬たらしむるものは大抵修飾格に立たしめたる
 ものなり。

聲たえずなげや鶯。

岩波高くゆく水の。

ゆく水の早くぞ人を思ひそめてし。

但し、こは動詞に少くて形容詞及其の系統をひけるものに多し。かくの如きものを
 修飾句と稱す。

述語の形を連體形にして附屬句たらしむるものは二様の用法あり。一はそのま
 ま體言に準せらるゝものなり。

夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。

たゞ浪の白きぞみゆる。

山さへ行くを松は知らずや。

之は人の見るべきにも非ず。

風俗の悪しきに赴く様水の下に就くが如し。

かくの如きものをば準體句と稱すべし。

二、はそれより直に體言につらねて連體語たる資格に立たしむるものなり。

雪いと白うおける朝やり水より煙のたつこそをかしけれ。

おぼしきこと言はぬは腹ふくるゝわざなりかし。

湯の湧き出づる響は雷のなりはためくが如し。

佐渡の國には金ありける由を能登の國の者ども語りけり。
かくの如きものは之を連體句と稱することをうべし。

今又附屬句をば如何なる單語の形をとるかとするに次の如く二分しうるなり。
一は體言に準せらるゝものにして一は用言としての用法によるものなり。何が故
にこの二種に限るかといふに、これら附屬句はそれが句なる上は一の體として取扱
はるゝことは自然の事にして即體言に準せられて種々の用をなしうべし。さてそ
他のものはその句の述語たるものゝ形をかへて種々に用ゐらるゝが故に自然
に用言同様の用法に立ちうべきは必然の事なり。

今かくの如き研究をなし行かむとするにあたりてその附屬句たりうべきもの
は如何なる性質の句なるべきかを明にせざるべからず、喚體句はその體固定して
動かすべからず。この故にこは成立せるまゝにて用ゐられざるべからず。即引用句
としてより外の用法なきなり。さてはその他は述體句なるべきものなり。その述體
句とても命令體の句は、その述語の形をかふる時は命令體たる性質を失ふに至る
べければ、これ又引用句としての外の用法なきなり。この故に叙述體の句に於いて
はじめて種々の附屬句をなしうるを見るなり。

さて、こゝに叙述體の附屬句として如何にあらはるゝかを檢せむには用言が如
何なる位格に立つかを檢して、それらの位格は、即叙述體の句が附屬句として立ち

うる各種の位格なることを知るをうべし。如何となれば、一の用言が、之に對する主
格を有する時は即叙述體の句をなすものなればなり。而用言は、それが述法に立てる
時は獨立の用法としてここにいへる附屬句に立てるものといふべからず。之を除
きて考ふるときは、裝法に立てるものとして連體格と修飾格とあり。この外には準
體言として種々の位格に立ちうることは既に述べし所なるが、それは準體言として
のものなれば、直接に位格をあらはすものにあらず。こゝに於いて余はすべての附
屬句をば、次の如くに分たむと欲す。

引用句

準體句

連體句

修飾句

今これらにつきてなほ少しく説明すべし。

彼意を決して「否余の書せるものなり」と答ふ。

あゝ世上何ぞ男でござるの人数少きや。

これらはその代表せる語の位置についていへば、準體句と共に名詞句とも稱せら
るべきものなり。されど、それは一旦成立せるものをそのまゝ引き來れるものにして、
その述語の形は元のまゝにして之を特に連體形になほして體言に準ずるに及ば

ざるものなり。かくの如きものをば準體句と區別しおくことは當然の事なり。これ即引用句と稱すべき性質のものなり。その他引用句と稱すべきものは次の如きものみならず。

乞ふその實の何なるかを語れ。

速にまかれと仰す。

今日雪ふらむとは誰も思はざりしならむ。

若菜つまむの心ならねど。

かくの如く一旦成立せる文をそのまま引き來れるものはみな引用句なるなり。

商業の興れるは工業に同じ。

余ははじめてその言の信なるを知れり。

薄莉萱のおのが衣にかゝれるもあはれなり。

これらは準體句なり。この名稱は著者が始めて用ゐしものなり。從來はこれを名詞句といへり。されど、名詞といへば、何かの名稱なるべく聞えて實際とあはず。準體句といふ方まされり。されど、體言句といふ名目は語調落ち付かず。この故に著者はその意義と形との二方面よりしていづれよりするも都合よき準體句といふ名をとれり。これその用法よりいへば、體言と同じく、或は主語となり、補語となりうるものにしてその形よりいへば、準體言と同じく、連體形よりなれり。かくの如き形より

なれるものは英語などにはなし。この故に準體句といふ名稱は意義、用法、形、及記號の便利よりいふも最妥當なるものなりとす。

引用句と準體句とは共に體言と同じ取扱をうけて、或は主格に立ち、賓格に立ち、補格に立ち、また時としては連體格にもたつものなり。而、そはいつにても體言と同様の取扱をうくるものなれば、たとへ連體格に立つ時の如く下の連體句と紛るゝが如き用法をなす時といへども、その形の上に於いては明に區別を立てうべきものなり。即この引用句及準體句が、連體格に立つときはいつも格助詞の助をかるなり。

まさにこれ日蘭なるの時。

たえむの心。

諸國に洪水出でたりとの電報。

連體句の時は連體形より直に接す。これその差の著しき點なり。引用句と準體句との句論上の取扱は全く同一なり。この故に之をその位格によりて名づくるときはその繁にたへざるに至らむ。又之を名詞句などいふに至りても二者共に名詞たる取扱を受くるものなれば、之を區別すると難し。しかるに、一は成立せる句そのまゝを取り來り、一はその連體形を以て體言に準じたる形を以てするものなれば句の形體上より見ても、句の用法上より見てもかくの如く命名し

て而區別するを以て利ありとなすべきなり。彼は紅塵空を蔽ふ活劇場裡に入り來れり。栗の大木眞黒に茂る邊に出でぬ。これらは連體句なり。この名稱も亦著者始めて名けしものなり。從來これを形容句又は形容詞句などいへれど、西洋文典の直譯にすぎずして國語の實際に適せず。即形容詞といへるものはかれの形容詞と異なるものを譯しおきながら句法上の名目のみにかくの如くするは甚當らず。故に著者は、連體語の役目を有して述語の連體形なる句をば連體句と稱せり。

唐辛子は勢よく生ひ立てり。

人も學びて後にこそ誠の徳はあらはるれ。

鱸聲雁の如くに我れは澄潭を下る。かくの如く修飾語の役目を有する附屬句は即修飾句と稱するものなり。從來はこれを副詞句と稱せり。しかれども、これは副詞の代表をなせるものにあらずして修飾語の代表をなせるものなれば、かくなづくるをよしとす。さてこれらはその述語は連用形なるを常とす。その連用形は動詞形容詞複語尾共に存す。但形式形容詞の「如し」は更に「助詞」を添へてあらはすことあり。有屬文を構成する原文を検すれば又喚體述體の二種ありとす。而喚體句の主文

となる場合と述體句の主文となる場合とあり。喚體句が附屬句たる場合は唯僅に引用句なる時のみにして其の他の際の附屬句には喚體句のなることなし。さて主文が喚體句なる時は之を喚體有屬文と稱し、主文が述體句なる時は之を述體有屬文と稱す。

喚體有屬文の例

雁のくる峰の秋ぎりはれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ。

こは主文たる喚體句の連體語たる世を附屬句が連體語として裝定したるものなり。

あふばかりなくてのみふるわが戀を人めにかくる。ことのわびしさ。

夕さればねにゆく鴛のひとりして妻ごひすなる聲のかなしさ。

この二文皆同じ關係なり。

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるがわびしさ。

こは喚體主文の連體語其の者が準體句たる述體句なる者なり。

白雪のけさはつもれる思ひかな。

こは喚體對象の連體語たる述體屬句なり。

花の木にあらざらめども咲きにけり。ふりにしこのみなる時もがな。

これも亦然り。

述體有屬文は又その主文が命令體なるあり、叙述體なるあり、これによりて更に命令體有屬文と叙述體有屬文とに分つ。

命令體有屬文の例。

己れの欲せざる所を人に施すことなかれ。

香をだに匂へ、人の知るべく。

今は心おきなく田舎に轉養せられよ。

いふことを休めよ、他郷苦辛多しと。

かならずその日たがはずまかりつけ。

梅の花の咲きたるを見にきたまへ。

あさなく、吾が見る柳鶯の來居てなくべき森にはやなれ。

叙述體有屬文の例。

皇國の民の忠勇義烈なるは今に始まれるに非ず。

多くの人は己が心のおろかなるを知らず。

余が昨日見たる本はこれなるか。

船子ども潮満ちぬといふ。

此歌は人麿が讀みけるなり。

人々おのが志せる道を行ふべし。

夜も更けし故車馬の往來も稀なり。

此事業は多くの人の思へるよりも遙にむつかし。

庭は掃ひ清むる人もなきまゝに太く荒れ果てたり。

有屬文の研究はその附屬句の研究を主題となしてなすを捷徑とす、この故に次には、順次に各附屬句につきて研究せむ。

(一) 引用句

引用句とは一旦成立せる句或は文をば文中の一成分として引用挿入するものをいふ。この故にこの種の句又は文は本來のもの其のまゝ取り來りて之が形を變更することなきものなり。

引用の語につきてはその大要をば第一部第四章の語の轉用のうちに説きたり。(七六三頁―七六四頁)その條に於いて引用の方式に直接引用と間接引用とあることをいへり。而直接引用のものは直にそを相當の格助詞に接せしめ、間接引用のものは「と」といふ助詞にて「いふ」といふ語の補語となし、さてその用言と共に體言の資格を與へらるゝものなることをいへり。而その説明の大體はまたこの引用句の説明にうつすことを得べし。

直接引用のものはそのまゝそれ相當の格助詞に接せしめて、體言同様の位格に立たしむるものなれば、之につきては特別に約束を定むることなし。

主格に立てるもの。

古池や蛙とび込む水の音は芭蕉の名句なり。

花咲けりは單文なり。

資格に立てるもの。

仰の旨にては誠にさる事あらむなり。

君の御諒には如何でか異存を申すべきなれど。

補格に立てるもの。

寶劍をばその人ぞもちたまへるなどいふをきいて。

夏下われはかれが歸りたりやを知らず。

乞ふその寶の何なるかを語れ。

御まへのありさまのをかしさつたのいろの心もとなきなどくちくきこえ

さするに。

三世の佛もいかにきく給ふらむとおもひやらる。

あふぎもてこぬかなどいひかはしつつけさうしつくるふ。

影こほる霜夜の月ぞ秋をおきて時こそあれとさやけかりける。

連體格に立てるものは常に、の助詞の助をかる。

「君やこむ我や行かむのいさよひに横の板戸もさすねにけり。

夕されば思ひぞしげきまつ人のこむやこじやの定めなければ。

「丹波路の大江の山のさねかつらたえむの心我が思はななくに。

「うらみわびまたじ今はの身なれども思ひなれにし夕ぐれ空。

有明の月ばかりこそ通ひけれくる人なしの宿の庭にも。

大貳すみともがさわぎの時うての使にて少將にて下りたり。

世間訴訟をことに執り申さむの心なりけれど。

言のとふ人ぞけふはゆかしき老いぬれば若菜つまむの心ならねど。

「忘れじの行末。

「とはむしも今はうしやのあけ方。

「あゝ世上何ぞ男でござるの人少きや。

修飾格に立てる引用句はなし。

間接引用のものは實は「と格の補語の位置に立てるものなり。先この「と格の補語

たるものをあぐ。

「海賊追ひくといふ事たえず聞こゆ。

「速にまかれと仰す。

「死にし子顔よかりきといふ様もあり。

「新院の御心中おぼつかなしとぞ申しける。

「左右大將つゝしみ給ふべし」と天文博士勘へ申したり。

「今日雪降らむ」とは誰も思はざりしならむ。

東風ふかば匂ひおこせよ梅の花あるじなし」とて春なわすれそ。

諺に「勉強は幸福の母なり」といへり。

旅人「此處は如何なる處にか候ふ」と問ふ。

伴善男「これは信の左大臣のしわざなり」と公に申しけり。

「君子は危きに近づかず」といふ本文あり。

「公治長が鳥語に通じたり」といふ説はよし無き事なり。

さてこれらは「いふ」と申す」と思ふなど、富士谷氏の所謂「五」と稱するものにして吾人の思惟の對象となるもの即ちその「いふ」「申す」「思ふ」などの用言の準體言の補格に立てるものをさすなり。しかるにその用言をば略し去りて」とより直に助詞につけて主格、補格又は連體格に立たしむることあり。これ即間接引用と稱するものなり。かくて主格のものは直に係助詞の「は」もに接せしめてあらはし、連體格のものは直に格助詞の「に」接するなり。而、これら以外のものは、皆と格補語に立てるものにして間接引用に立てるものといふべからず。次にその間係を例にて示すべし。

會者定離と(いふ)はこゝをさす。

(落窪物語)

君いとわびしと思ひ給へりといふはおろかなり。

(源 葵)

世に思ひなしといふはかゝる境遇にやあらむ。

(枕 十)

あさましといふはよのつねなり。

(枕 十)

にくしといふはよのつねいとあいきやうなし。

(拾遺集)

まことにあさましうけしようなりといふもよのつねなり。

(源 推)

君子は危きに近づかずといふの本文あり。

(源 藤)

又とて「よりして連體格に立たしめたるものあり。」

あすいり給はんと(いひ)ての日は、

みづからはわたりたまはん事あすと(いひ)てのまだつとめておはしたり。

引用句は、その直接なると間接なるとをとはす、引用せらるゝにあたりて、往々その或部分を省き去らるゝことあり。今それらの大要をのべむ。

合文が引用句となるときはその主句を省き去ることあり。

「悲しといはずして讀者が内に自ら悲を起せば……」なり。

「笛の音の春面白くきこゆるは花ちりたりとふけば……なりけり。これらは直接引用のものなるが、間接引用のものにもあり。

「初雪のふらば……といひし人はここで空しく晴るる夕暮の空。いつしか出でさせ給は……」などきこえさするに。その外種々の省略の行はるゝをみる。

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかね色香は折りて……なりけり。救なればいともかしこし鶯の宿は……と問はいかこたへむ。里にまかりいでしづまらせ給ひなむに……などささめく。

無用の費用を有用の爲に……と貯蓄するなり。而、間接引用の時は最多くこの省略の行はるゝを見る。

(二) 準體句 準體句とは叙述體の句の述語が準體言となりて、文中の體言の位置を占めたるものをいふ。而、こは體言附屬の助詞を伴ひてあらはるゝこと最多し。

準體句たるものは主格資格補格に立ち、また、まれに連體格に立つものあり。主格に立てるもの。
水鳥の隙無く立ち騒ぎしがいとをかしく見えしなり。
ある人の子の童なるひそかにいふ。

犬の諸こゑにながくとなきたるまがしくしくにくし。
白き鳥の嘴と足と赤きあり。
こゑみなかれわたりにたるいといみじうきこゆ。

月のすみたるは快きものなり。
君子の祖先にあつきは榮を求むる爲にあらず。

花紅なるは椿なり。
衆愚の謬々たるは一賢の唯々には如かず。

雁の空高く渡るも見ゆかし。
夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。

薄莉萱のおのが衣にかゝれるもあはれなり。
かばかりの事の打思ひ出でらるゝもあり。

たゞ浪の白きぞみゆる。
人よりもまさるうれしさのおのづから色にいづるぞことわりなる。

そのきはに見し人の有さまのかたみにおほえなりしなんかしこかりし。
をりふしのうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。

資格に立てるものは形式動詞に對せるものはなし。
士の世に處するは錐の囊中にあるが如し。

使の男矢の飛ぶが如く疾く走る。
恐れをのけるさま雀の鷹の巢に近づけるが如し。
そはきく人のあしきなり。

此歌は人麿がよみけるなり。

補格に立てるもの。

山さへ行くを松はしらすや。

義士等は其の日の來るを待ち居たり。

時雨の音一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して。

月の面白う出でたるをめでけり。

家の人々の歎くをも更に顧みず。

あふぎどものをかしきをその比は人々もたり。

光陰の速なるは恰も水の流るゝに似たり。

女子どもを六田の里に親しき者のありけるにあづけて。

ともすれば風よるにぞ青柳の絲はなかく亂れそめける。

その困難は盲人の杖を失へるに同じ。

政所の歎かせ給はんには太閤もさのみ心強くはおはせじ。

君の行くは我が行くよりよし。

譽あらむより誹なかれ。

連體格に立てるもの。

金は色の黄なるが爲に貴きか。

山高きが故に人之を貴ばず。

名有る人も多く交れる中にこれはことにすぐれたり。

重文を以て準體句の地位に立たしむるものあり。

兄の弟を愛し弟の兄を敬ふは友悌の道なり。

春過ぎ夏來り秋去り冬至るは天地の常數なり。

五常の道すたれて風俗日に下り行くこそ數かはしけれ。

邪なる者は久しからずして滅び亂れたる世も正に反るは古今の道理なり。

(三) 連體句

連體句とは叙述體の句の述語をば連體形になして、之を用ゐて體言の裝定をな
さしめたるものをいふ。

連體句は主文中の體言の裝定をなすものなるが、その對當の體言は主語たるも
のにも賓語たるものにも補語たるものにも又連體語たるものにも修飾
語たるものにもいづれにても裝定しうるものなり。

主格たる體言に對する連體句

河原などには馬車の行き違ふ道だにもなし。

人跡通はざる地も邊土にはあり。

湯のわきいづる響は雷のなりはためくが如し。

資格たる體言に對する連體句

東西の市は人集まる所なり。

かの木の茂りたる山こそ神の鎮ります所なれ。

わが國人の公德に乏しきは識者の常に慨嘆するところなり。

人ざまもよき人におはす。

おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなりかし。

補格たる體言に對する連體句

ことさらに人くまじきかくれが求めたるなり。

親ののたまふ言をひたぶるにいなみ申さじ。

佐渡の國には金ありける由を能登の國の者どもかたりけり。

瀧の音のきこゆる宿に泊りぬ。

淡路島かよふ千鳥のなくこゑにいくよねざめぬすまのせきもり。

朝なくわが見る柳うぐひすの來るて鳴くべき森にはやなれ。

栗の大木眞黒に茂る邊に出でぬ。

よき人ののどやかに住みなしたる所にはさし入りたる月の光も一きはしみ
しみと見ゆるぞかし。

連體格たる體言に對する連體句

君が植ゑおきし櫻の木蔭もなつかし。

此女所縁も無き身の行く末を思ひ煩ひけり。

我が亡からむ後のかたみに此刀を汝に與ふるなり。

義經が蝦夷に渡りし事の眞否は詳かならず。

修飾格たる體言に對する連體句

此人財のあらむ限り書籍を購ひけり。

余は父の命じ給ひし通りふるまひたり。

此年は雨風稀なる故に花のさかりも長し。

侍どもは刀のさゝらに成る程はげしく戦ひたり。

さて世には、この修飾格に立てる體言又は時處をあらはす體言を裝定する連體
句を誤解して其の體言を以てこの附屬句と主文との接續をなすものゝ如くいへ
るは西洋文典の翻譯より思ひつきたる論にして取るに足らざるなり。

「昨日參上致し、處御不在にて拜眉を得ず。
「明日參上致すべく候間、御差支なくば御在宅有之度候。

「今般規約右の通相定め候條。違背有之間敷候。」

「今日は雨降り候爲。路悪しく候。」

「明日は差支有之候故。參上致さず候。」

これらは決して接續詞にあらず。然れども、その意義廣汎にして十分に之を限定すべき必要あるが故に之を裝定すべき語又は句を伴へるなり。而その意義は頗輕く、殆結體せしめむが爲のみのものと見ゆれば、かくの如く誤まらるゝに至りしならむ。然れども若此の如きものを接續詞とせば、すべて關係的意義を有せる體言は皆接續詞たることとなるべし。

かくてかゝる體言をば接續詞とし、その連體句と體言とを一にして之を副詞節などと稱する人あり。これも西洋文典の翻譯より思ひ付きたるにすぎずして國語の文法としては條理なきものなり。

舟川尻にいたれる程。十六夜の月さし出でたり。

此婦みまかりける後。櫻忽ちに枯れたり。

獅子子を産みて三日を経る時。數千丈の石壁より之を擲ぐ。

余は彼の留まる所に留まらむ。

一人の倒れたる上に又他人の倒れかゝる。

名ある人も多く交れる中に此人は殊にすぐれたり。

此夜おのれらは瀧の音の聞ゆる宿に泊りぬ。
此年は雨風稀なる故に花のさかりも長し。

今かゝるものを其の文中の所謂副詞を裝定する點より見て副詞節 Adverbial Clause なることを承認せむか。注意せよ。そは體言を裝定するが故にあらずして裝定したる體言の資格によりて命名せられたるものなることを、而してこの種の論者は別に形容詞節といふものを説けり。その例

人跡通はざる地も邊土には多かり。

世また泰平に屬すべき期や。近きにあり。

文ことばなめき人こそいとくけれ。

河原などには馬車の行き違ふ道だにもなし。

此たくみらが申す事は何事ぞ。

多能は君子の耻づる所なり。

東西の市は人集まる所なり。

かの菴は山守が居る所なり。

花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなる。

是れたと聖運の天にかなへる故なり。

君が植ゑおきし櫻の木蔭もなつかし。

此女所縁もなき身の行末を案じ煩ひけり。
余が住みたりし家の隣に貧しき老人住みたり。

櫻色に衣は深くそめて著む。花の散りなむ後のかたみに。

これと副詞節と稱せらるゝものと形式上何等の相違あるべきぞ、これを形容詞節といはゞかれも形容詞節なるべし。かれを其の装定せられたる成分の意義よりして副詞節なりといはばこれらは皆名詞節なるにあらずや。殊に「故」「所」「後」「時」などいふ體言を装定する附屬句が何故に一方には副詞節にして一方には形容詞節なりや。又なほその限定せらるゝ語の意義を以てせば末の四例こそは純粹の形容詞節なれ。要するにこの種の論者の「節」の意義は實に皮相の見にして又不合理矛盾を有するものなることを見るべきなり。

前にもいへる如く國語にては關係副詞關係代名詞などなきが故にそれらを有する外國文を國文に譯するにあたりてはよくせずば、かゝる誤りを生じ易きものなることを注意すべし。

さて又こゝに複文を以てこの句の地位に立たしむることあり。
重文を以て連體句の地位に立たしめたるものゝ例。

わが國には山紫に水明かなる佳景多し。
山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも。

風荒れ浪怒れる海の上に漂へる船あり。

花さき鳥啼く春の空はいとのどかなり。

徳高く行善き人は世に敬せらる。

頭は猿に似尾は蛇に似たる怪獸殿上にあらはる。

(四) 修飾句

修飾句は文中にありて修飾格に用ゐらるゝ附屬句なり。これに二の形あり。一は叙述體の句の述語を連用形になしてこれよりして修飾句に用ゐるものなり。一は副助詞を附するによりて修飾句の成立するものなり。述語の連用形なるによりて修飾句たるものは、最多くあらはるゝは形容詞及形式形容詞ならびに形容詞の性を帯べる複語尾なり。

よしの川岩波高くゆく水の。

君は餘念なく文章を起草し居られたり。

我は心おきなく田舎に轉養せむ。

松の常盤なる如くわれも節操をばかへじ。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ。

ほととぎすおもふもしるくまづこゝになけ。

聲たえずなげや鶯一年に再とだにくべき春かは。

影だにも見えすなりゆく山の井は浅きより又水やたえにし。
名汚れては武士の道立たず。

思ふ事なくてぞ見まし、ほのくくと有明の月のしがの浦なみ。
秋はてゝものをこそ思へ。露かゝる萩の上ふく風につけても。

われとただ行きてこそみめ。法の道人の教を知べとはせじ。
花の香を風の便にたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる。

修飾句は又副助詞「ばかり」「まで」を附するによりて成立す。
その男が尻鼻血あゆばかり必蹴たまへ。

今朝の風は身もこゝゆるばかり寒し。
吾は船の帆かげの見えすなるまで港にたゝすめり。

秋風膚寒きまでに成りぬ。
準體句を以て形式副詞の賓語の位置に立たしめ、以て修飾格に立たしむることあり。こは修飾句にあらねど序にあぐ。

秋のけはひの立つまゝに土御門殿のありさまいはん方なくをかし。
露ならぬ心の花におきそめて風吹くごとに物おもひつゝ。

日影はさしながら雨降る。
又形式形容詞「如し」の補格に立てる準體句はその「如し」と共に修飾格に立つことあり。

り。これらは修飾格に立てるものながら、修飾句にはあらず。句としてはいづこまで準體句又は連體句たるなり。かくの如きものをも修飾句といふ時は甚しき混亂を生すべきものなり。注意すべきものなり。

(五) 附屬句の位置

附屬句の状態は前條に述べしが如し。今はその附屬句の位置を論せむとす。

附屬句は主文の成分たる語を代表するものなるが故に、その代表せらるべき語の位置は即附屬句の占むべき位置なり。

すべて連體語はその對當の體言の上にあるべきものなること上にのべし如くなれば、連體句も亦その對當の體言の上にあるべきものなり。

若き女の抱きたる子色赤き帽子をかぶる。
手あしき人の見苦しとて人にかゝするは悪し。

寒さの烈しき土地必しも雪多からず。
君が植ゑし一村薄蟲の音のしげき野べともなりにけるかな。

雪ふる故人は來ず。

主格に立てる附屬句は主文の述語の上にあるは通例なれど、又反轉の法則によりて述語の下にあることあるは單語の主格に同じ。
なげかしき事のまさるぞいとくるしき。

(紫式部日記)

あけぬるか川瀬の霧のたえぐにをち方人の袖のみゆるは。

(後拾遺集)

ことわりやおもひくらぶの山櫻にほひまされる花をめづるも。

(金葉集)

資格に立てる附屬句は主文の述語又は形式副詞の直上にあること單語にてなれる資格に於けると同じ。但「す」といふ形式動詞の資格としては附屬句を使用せざること既にのべしが如し。

群山東西にめぐりて五百重波の立ち續けるが如し。

風吹く毎に此家船のゆらめくが如く動く。

そはきく人のあしきなり。

これは人の見るべきにもあらず。

補格に立てる附屬句もまた單語の補格にかはらず、或は文の冒頭にあり、又主文の述語の下にあり、その述語の上にあるものゝ例次の如し。

いづくまでおくりはしつと人とは、あかぬわかれの涙川まで。

影こぼる霜夜の月ぞ秋をおきて時こそあれとさやけかりける。

君子は危きに近づかずといふ本文あり。

山さへ行くを松は知らずや。

多くの人はおのが心の愚なるを知らず。

女子どもを六田の里に親しき者のありけるにあづけて。

あふぎもてこぬかなどいひかはしつゝけさうしつくるふ。

君の行くは我が行くよりもよし。

その述語の下にあるものゝ例。

何事ぞなりまさがいみしうおちつるは。

くればとくゆきてかたらむあふとのとほちの里のすみうかりしも。

いづくんぞしらむこの事あるを。

誰か知らむ遠征の志あるを。

おぼつかな都の空やいかならむこよひ明石の月を見るにも。

しかじうき世をいとひ誠の道に入りなむには。

思ひきや君なき宿を行きて見むとは。

知らずや人をかくこひむとは。

圖らざりき再び君に回り遇はんとは。

鶯の笠にぬふてふうめの花をりてかざさむ老かくるやと。

たよりあらばいかで都につげやらむけふ白河の關はこえぬと。

奥山の苔の衣にくらべ見よいづれか露の置きまさるとも。

やよやまで山郭公ことつてむわれ世の中にすみわびぬとよ。
「と補格のものは頗多く反轉法によれるを見る。又この「と」にて導かれたる附屬句と主文との排列の錯雜せること次の如くなるものも例なきにあらず。

屬の主 主の主 屬の述 主の述

此の歌はある人ならの帝の御歌なりとなむ申す。

屬の補主の主 屬の述 主の述

さても競を宗盛年來の主を捨て他人の門踏まむする者と思ひけむことのおうなさよ。而全文は連體句を有せる喚體の文なり。

修飾格たる附屬句も又單語の修飾格の位置に同じ。その用言又は述語の上にあるものゝ例、

とはざりし人もとふべくわが宿の花のさかりをすごさすもかな。
秋されば山とよむまでなく鹿にわれおとらめやひとりぬる夜は。
うきてゆく紅葉の色のこきからに川さへ深く見えわたるかな。
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ。
聲たえずなけや鶯。
影だにも見えすなりゆく山の井は淺きより又水やたえにし。
よしの川岩波たかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし。

たゞに病みしぬるよりも人ぎゝ耻しくおぼえたまふなりけり。
かならずこの日たがはずまかりつけ。

憚る所なく例あらむにまかせてなだむることなくきびしう行へ。
上達部うへ人などもあへなく目をそばめつゝいとまばゆき人の御おぼえなり。

反轉の法によれるもの。

山風に櫻ふきまきみたれなむ花のまぎれに君とまるべく。

君が代は鶴の郡にあえてきねさだめなき世の疑もなく。

初を花花に見むとし天の川へなりにけらし年のを長く。

雲もみな波とそみゆるあまもがな、いづれが海ととひてしるべく。

空や海海や空ともみえわかす霧も波もたちになちつゝ。

有屬文に依存する附屬句は一文内一箇に限らず種々複雜なる形にてあらはるゝことあり。其の状態一樣ならず或は同種の附屬句を二以上有するあり、異種の附屬句を二以上有するあり。附屬句の更に附屬句を有するあり、其の關係も亦かの語のものゝ如く、從屬組織のものあり、一致組織のものあり、並立組織のものあり、左に數例をあげむ。

(一) 手あしき人の見苦しとて人に書かするは惡し。

こは從屬組織に立てる有屬文なり。先「手あしき」は人の連體格に立てり、「見苦し」は引用句として補格に立てり。而「手あしき」人の見苦しとて人に書かする「は」準體句として主格に立てるものなり。かくて「手あしき」見苦しは主文に直接の關係を有せず。(二)「髪あしき」人のしるき綾の衣著たる「し」かみたる髪に葵つけたる「あしき」手を赤き紙に書きたる「げす」の家に雪のふりたる「又」月のさし入りたる「もいとくちをし」。

こは並立組織に立てる五個の準體句を主格となしたる有屬文なり。而第一の準體句の主語たる體言に對して從屬せる連體句を有せるなり。

(三)「あやふ草は岸の額におふらむ」も實に「たのもしげなくあはれなり」。

こは主格が準體句にして別に修飾語の資格を有する修飾句を述語の上に有せり。

(四) 安元のころほひ御方違の行幸のありしに、さらでだに「鶏人曉を唱ふる」聲明王の眠を驚かす程になりしかば。

この文に於いては「御方違の行幸ありし」は時を示す補格となり、「鶏人曉を唱ふる」は「聲」の連體格たる連體句にして直接に「明王の眠を驚かす」に關せず。さてその「聲」は附屬句を連體格として有して「明王の眠を驚かす」の主格たり。かくて「鶏人より驚かす」に至るものは更に「程」の連體格に立てるものにして頗複雑なる組織をなせり。

(五) 余は「菜の花のさきたる」に「蝶のとまれる」を見たり。

この文は補格二つながら準體句なる例なり。

(六) 澁佛の頃祭の頃「わか葉の梢涼しげ」に「茂りゆく」程こそ「世のあはれも人の戀しさもまされ」と「人のおほせられし」こそ「げにさるものなれ」。

この文にありては附屬句四様ありて、一個は附屬句中の附屬句となり、その附屬句を有せるものは更に連體句として立ち、一個は引用句となり、而それら全體が準體句として主格に立てるものなり。

(七) 四月の晦日、五月の朔日などの頃ほひ「橘の濃くあをき」に「花のいとしろく咲きたる」に「雨のふりたる」つとめてなどは世になく「心ある」さまにをかし。

この文にありては二個の並立組織に立てる「格補語」たる準體句を有する複文を以て主文の主語の連體格に立たしめたる上に、述語中の修飾語に對しての連體句を有せるものなり。

二 有屬文の照應及省略

これにつきて先區別すべきは引用句と他の附屬句となり、引用句はすべて句としての完體を取り來るものなれば、係と結との照應の如きは常に完全に行はるゝものなり。されど他の附屬句は然らず。これらにありては、そのうちに曲調を生ずべき係助詞を有することありとも、それに對する終止の形をあらはすことなし。かく

の如くなる所以は、その終止の述語を失ひたるが上に一文としての意義は附屬句となる利那に消滅し去り、唯一の語たる資格のみを有するものとなればなり。然るに往々之に應ずる終止の曲調を主文中に見せむと努むるものあり。これ甚しき誤謬なり。附屬句内に起るべき形式上の變化は決して、其の外に影響を及ぼすべき理由なきは重文合文に於ける場合に異なることなし。今二三の例をあげて終止の消滅せるものを示さむ。

連體格に立ちて終止の消滅せし例。

そむけどもそなたさまにぞ月影はありける里の影ぞこひしき。

世をそむく處とかきく奥山は物おもふにぞ入るべかりける。

みかど後の御よはひのほどいとをかしくなんみえさせ給ひける程に。

いかでかうちいづべき事のさまならねば。

おとにこそふくともきし秋風の袖になれぬる白川のせき。

われとこそながめなれにし山のはにそれも形見の有明の月。

體言に準せられて終止の消滅せし例。

右の大殿の藏人少將とかいひしは三條殿の御腹にて。

「きさらぎばかりに柳のしなひ物よりけに長きなむ此家」にありけるををりて、さて又附屬句と主文との間に語法の照應すべきを説く人あり。例へば、

國に賢君あるは人民の慶福なり。

國に賢君ありしは人民の慶福なりき。

國に賢君あらむは人民の慶福ならむ。

の如く時に於いて一致すべく、又此時より彼の時をいふには互用すとて、

國に賢君あらむは永く人民の慶福となりなむ。

といふを可とすといふ説あり。これらは皆さる事なれど、其の説甚くはしからず。此の時より彼の時をいふといふ此の時と彼の時とは如何なる關係をさすものか、明ならず。若之が所謂過去現在未來より過去現在未來の三時を互にいふものならば、何ぞことしく時の呼應といふことを必要とせむや。さる義ならば、何人もかゝる事にまざるべくもなく、又規定を設くる必要なきなり。今これを如何様にいひかへうべきか試みむ。

國に賢君あるは(單に事實として説く必しも現在と限らず)人民の慶福なり。(現在に慶福なりといふに限らず斷案なり。)

國に賢君ありしは(既存の事實として説く)人民の慶福なり。(これも斷案なり。かくいひて更に不可なし。)

國に賢君あらむは(假設の事件として説く必しも未來とかぎらず)人民の慶福なり。(これも假設上より來れる斷案なり。かくいひても更に不可なし。)

國に賢君あるは人民の慶福なりき。こも可なり。國に賢君あるは廣き意義にて現在過去未來に關せぬ事實なりとすれば、それは現在に人民の慶福なるが如く過去にても人民の慶福なりし事は當然の事なり。

國に賢君ありしは人民の慶福なりき。こは勿論可なり。但そは過去と過去とが照應せりといふ爲に可なるにあらず。過去の事實を述べしものなれば、かくの如くしてそはじめて過去にありての事なるを示しうるなり。

*國に賢君あらむは人民の慶福なりき。こは不可なり。主語は假設なるに述語が既存の事實として述ぶるは不理なればなり。

國に賢君あるは人民の慶福ならむ。こは可なり事實よりして、結果を想像したるものなり。

國に賢君ありしは人民の慶福ならむ。こは可なり。なほ事實よりして、結果を想像したるものなり。

國に賢君あらむは人民の慶福ならむ。こは可なり。但未來の時と未來の時とが打合へる故に可なりといふにあらず。假設よりして更に其の結果を想像したるものなればなり。

以上に述べし所を以てすれば、

附屬句を主格とせる有屬文に於ける述語と附屬句との語法上の關係は主格

が事實にあれ假設にあれ述語は之に對して斷案を下し又は想像をなしうべし。たゞ主語が假設なる時は述語が過去なる語法に従ふべからざるなり。其の他は毫も支障なきなり。但、現在の事實を現在に述べ過去の事實を過去なりしさまに述べむには其の語法を一致せしめではかなはぬなり。

かくの如くなればその照應といふものもさる窮屈なるものにあらざるを知るべきなり。

附屬句内の省略は最多く引用句に行はる。即完結終止として附屬句たるべきものにして、にて示されたる補格のもの、にて示されたる連體格のものに於いて最多きなり。

わすれ草なにをかたねにして生ゆる者かと思ひしはつれなき人の心なりけり。

櫻花よきて(吹け)とおもふかひもなくこの一本と春風ぞ吹く。見るもうしさすがさこそ(來め)と待つ暮にあすかならず(來む)の人の玉章。

見し人もなきが數そふ露の世にあらましかば()の秋の夕暮。附屬句と附屬句との間、又は附屬句と主文との間に共通の語ありて之を省きても意義通ずる時は略することあり。

げすの家に雪のふりたる。又(げす)の家に月のさし入りたる。もいと口をし。

佐久間盛政柳が瀬にて中川清秀を討取りける時秀吉長濱より一騎がけにて
(柳瀬へ)來り(佐久間盛政を)攻められけり。
例はいくらもありぬべけれど、煩はしきを厭ひてこゝにて止めぬ。

第三 修辭的文結合

修辭的に文を結合して一體とならしむるものは、かの掛詞の法と兩屬的連鎖語となり。今之につきて述べむとす。

抑掛詞の法によりて、又兩屬語によりて、文を結合するは一種の技巧より生ぜしものにして意義上二文なるものを一文の如くせしむるものなれば道理上無理なるものなれど諷詠の文としては、又興味を感せしむるなり。
掛詞によりて文の結合せらるゝ形を見るに或は重文の上句が下句の成分に結合せられ、合文の伴句が主句の成分に結合せられ、附屬句が主文の成分に結合せらるゝなど、種々あり、又全く形體上關係なき二文を結合せるもあり、これも例によりて解説せん。

(一)かへるさをまち試みよ、かくながらよもたゞにては(やまじ)

こはかへるさには山科里に立ちよらむとてそれにかけてるなり。

山科の里。

(二)都いでゝけふ(三日にして)

みかの原(に出づ)

いづみ川かは風寒し、衣(かせ)

鹿脊山(よ)

こは重文を結合して更に他の互に獨立なる文に結合し、別に命令體文と呼格語との結合あり。

(三)別るれば心をのみぞ(つくす)

つくし櫛さしてあふべき程をしらねば。

こは合文の伴句中の枕詞に主句の述語をかけたなり。しかして轉置法によりたれば一文の形環の如くにして終る所なし、掛詞にはかゝる類多し。今次にこの例をなほあげん。

(四)秋の夜の月や(をしき)

をじまの(あまの)

あまの原明がた近き沖のつり舟。

これ即環の如き形になれるなり、をしまよりつり舟までは主格なり、をしまに述語をかけて轉置せるなり、而、なほ海士とあまの原とかけたり。

(五)大かたの秋の寢覺の露けくは又たが袖に(あるか)

あり明の月。

これも轉置になれる主語に其の文の述語をかけたなり。

(六)しるらめや身こそ人めを(憚れ)

はどかりの關に涙はとまらざりけり。

こは上文の述語を下文の補語の連體語にかけたなり。

(七)世の中をそむきにとてはこしかどもなほうきことは(おほし)

大原の里。

こは合文中の伴句の補語を下に下して、主句の述語にかけたなり。

さて一の文を他の文成分に言掛くる時は終止の形は消滅するものなれば、その言掛けられたる上文中に、曲調を起すべき助詞ありとも、決してその勢力を言掛けたる文中に及ぼすことなし。この故にかゝる際には曲調はあらはれず。その例、

雪ならば籬にのみはつもらじと思ひとくにぞしらさくの花。

あぢきなく思ひこそやれつれくと獨やゐでの山吹の花。

月ぞ住む誰かはこゝにきの國や吹上の千鳥ひとりなくなり。

さよ千鳥こゑこそ近くなるみ瀉傾く月にしほやみつらむ。

兩屬的連鎖語は一の文成分たると同時に他の文成分たるものにしてこの語の媒介によりて二文は合體して一となれるものをいふなり。その例、

(一)君ならで誰にか見せむ

(をば)

梅の花

(の色をも香をも知る人ぞ知る。

こは上文下文形體を別にせるものなるが連鎖語は上文にては補語たり、下文にては連體語たり。この力にて一連の文となれり。

(二)折りとらば惜しげにもあるか、

櫻花 (をば)

(をば)いざ宿かりて散るまでは見む。

こは櫻花が合文なる上文の爲には伴句には補語となり、主句には主語となるものを下文には再び補語として、これにて獨立の二文を結合せしめたり。

(三)あだなりと名にこそたてれ。

櫻花 (は)

(は)年に稀なる人もまちけり。

これは上下二文の主語をかねたる連鎖語なり。

(四)夜やくらき道やまどへる

時鳥 (は)

(は)わが宿をしもすきがてになく。

これも(三)の例に同じ。

(五)春霞なにかくすらむ。

櫻花

(を)

(の)ちるまをだにも見るべきものを。

こは上文の補語にして下文の屬文の主語たる連鎖語なり。

(六)折りつれば袖こそ勻へ。

梅の花

(を)

(が)ありとやこゝに鶯のなく。

こは上の合文の伴句の補語にして下文の附屬句の主語たる連鎖語なり。

かゝる例はまた枚擧に遑あらず。歌謡は多くかゝる組織をなせり。古今集一の巻のみにてもいくらもうべきなり。今はこゝに筆を擱く。

日本文法論終

余が日本文法論は茲に終を告げたり。顧みれば呶々數萬言直言憚る處なく罪を世に獲るもの蓋少しとせず。これ實に著者禮に嫻はざる罪なり。敢へて江湖に謝する處なり。然りと雖、今の日本國語の状態を見よ。熱血あるもの、黙視しうべき秋ならむや。これこの著者をして狂熱入りてこの迂拙の言をなさしめたる所以なり。著者の期する所はこの著によりて國語研究の一新動機を世に呈せむと欲するにあり。固陋短才偏見もあるべく、謬斷もあるべし。若諸家の指教をえば幸、何ぞ之にしかむや。叙述の體裁或は繁に或は簡に頗秩序なきもの、如くなれども、この著の目的はかれに存せずしてこれに存するものなれば、冀くは恕せらるゝことを得む。こゝに筆を擱くにあたりて一言の辭を題す。

本書を刻版に附するに際し紙数の多大にならむことを恐れて特に行間を密にしたり。これが爲に閱覽の際讀者の煩となることあらむは深く謝する所なり。しかもかくの如くにしてもなほ本文のみにて正に千五百頁に至れり。あはれかくの如き不急の悪書がかく多大の紙頁を占むることを得たるは實に出版者の好意なり。しかして又明治昭代の餘澤なり。こゝに校正を終ふるにあたりて感謝の意を表す。

明治四十一年七月十五日 書寫 藤村 謙

日本文法論索引

●この索引には本文中にあげたる各種の術語、人名、書名、件名等をあぐ。
●この索引は漢字及かな索引を本體とし、終に洋字索引をあぐ。

ア

あ(自稱の代名詞)……………七四二
あ(他稱の代名詞)……………九三三・九三六
読……………一六
あの……………九二六
網の綱手……………二七
あゆひ(脚結)……………一四・五・一六・一七・一八・一九・二〇・二一・二二・二三・二四・二五・二六・二七・二八・二九・三〇・三一・三二・三三・三四・三五・三六・三七・三八・三九・四〇・四一・四二・四三・四四・四五・四六・四七・四八・四九・五〇・五一・五二・五三・五四・五五・五六・五七・五八・五九・六〇・六一・六二・六三・六四・六五・六六・六七・六八・六九・七〇・七一・七二・七三・七四・七五・七六・七七・七八・七九・八〇・八一・八二・八三・八四・八五・八六・八七・八八・八九・九〇・九一・九二・九三・九四・九五・九六・九七・九八・九九・一〇〇・一〇一・一〇二・一〇三・一〇四・一〇五・一〇六・一〇七・一〇八・一〇九・一一〇・一一一・一一二・一一三・一一四・一一五・一一六・一一七・一一八・一一九・一二〇・一二一・一二二・一二三・一二四・一二五・一二六・一二七・一二八・一二九・一三〇・一三一・一三二・一三三・一三四・一三五・一三六・一三七・一三八・一三九・一四〇・一四一・一四二・一四三・一四四・一四五・一四六・一四七・一四八・一四九・一五〇・一五一・一五二・一五三・一五四・一五五・一五六・一五七・一五八・一五九・一六〇・一六一・一六二・一六三・一六四・一六五・一六六・一六七・一六八・一六九・一七〇・一七一・一七二・一七三・一七四・一七五・一七六・一七七・一七八・一七九・一八〇・一八一・一八二・一八三・一八四・一八五・一八六・一八七・一八八・一八九・一九〇・一九一・一九二・一九三・一九四・一九五・一九六・一九七・一九八・一九九・二〇〇・二〇一・二〇二・二〇三・二〇四・二〇五・二〇六・二〇七・二〇八・二〇九・二一〇・二一一・二一二・二一三・二一四・二一五・二一六・二一七・二一八・二一九・二二〇・二二一・二二二・二二三・二二四・二二五・二二六・二二七・二二八・二二九・二三〇・二三一・二三二・二三三・二三四・二三五・二三六・二三七・二三八・二三九・二四〇・二四一・二四二・二四三・二四四・二四五・二四六・二四七・二四八・二四九・二五〇・二五一・二五二・二五三・二五四・二五五・二五六・二五七・二五八・二五九・二六〇・二六一・二六二・二六三・二六四・二六五・二六六・二六七・二六八・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七三・二七四・二七五・二七六・二七七・二七八・二七九・二八〇・二八一・二八二・二八三・二八四・二八五・二八六・二八七・二八八・二八九・二九〇・二九一・二九二・二九三・二九四・二九五・二九六・二九七・二九八・二九九・三〇〇・三〇一・三〇二・三〇三・三〇四・三〇五・三〇六・三〇七・三〇八・三〇九・三一〇・三一〇

イ

ある……………九四七
あれ(代名詞)……………九三三・九三六
ア韻……………九五三
い(助詞)……………六九三
い(接辭)……………六九四
有形體……………二六
有形體言……………二六
有屬文……………一四七・一四八・一四九・一五〇・一五一・一五二・一五三・一五四・一五五・一五六・一五七・一五八・一五九・一六〇・一六一・一六二・一六三・一六四・一六五・一六六・一六七・一六八・一六九・一七〇・一七一・一七二・一七三・一七四・一七五・一七六・一七七・一七八・一七九・一八〇・一八一・一八二・一八三・一八四・一八五・一八六・一八七・一八八・一八九・一九〇・一九一・一九二・一九三・一九四・一九五・一九六・一九七・一九八・一九九・二〇〇・二〇一・二〇二・二〇三・二〇四・二〇五・二〇六・二〇七・二〇八・二〇九・二一〇・二一一・二一二・二一三・二一四・二一五・二一六・二一七・二一八・二一九・二二〇・二二一・二二二・二二三・二二四・二二五・二二六・二二七・二二八・二二九・二三〇・二三一・二三二・二三三・二三四・二三五・二三六・二三七・二三八・二三九・二四〇・二四一・二四二・二四三・二四四・二四五・二四六・二四七・二四八・二四九・二五〇・二五一・二五二・二五三・二五四・二五五・二五六・二五七・二五八・二五九・二六〇・二六一・二六二・二六三・二六四・二六五・二六六・二六七・二六八・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七三・二七四・二七五・二七六・二七七・二七八・二七九・二八〇・二八一・二八二・二八三・二八四・二八五・二八六・二八七・二八八・二八九・二九〇・二九一・二九二・二九三・二九四・二九五・二九六・二九七・二九八・二九九・三〇〇・三〇一・三〇二・三〇三・三〇四・三〇五・三〇六・三〇七・三〇八・三〇九・三一〇・三一〇

禁(イサメ)……………一六・三二
已然形……………三三・三四・三六・三九・四一・四三・四五・四七・四九・五一・五三・五五・五七・五九・六一・六三・六五・六七・六九・七一・七三・七五・七七・七九・八一・八三・八五・八七・八九・九一・九三・九五・九七・九九・一〇一・一〇三・一〇五・一〇七・一〇九・一一一・一一三・一一五・一一七・一一九・一二一・一二三・一二五・一二七・一二九・一三一・一三三・一三五・一三七・一三九・一四一・一四三・一四五・一四七・一四九・一五一・一五三・一五五・一五七・一五九・一六一・一六三・一六五・一六七・一六九・一七一・一七三・一七五・一七七・一七九・一八一・一八三・一八五・一八七・一八九・一九一・一九三・一九五・一九七・一九九・二〇一・二〇三・二〇五・二〇七・二〇九・二一一・二一三・二一五・二一七・二一九・二二一・二二三・二二五・二二七・二二九・二三一・二三三・二三五・二三七・二三九・二四一・二四三・二四五・二四七・二四九・二五一・二五三・二五五・二五七・二五九・二六一・二六三・二六五・二六七・二六九・二七一・二七三・二七五・二七七・二七九・二八一・二八三・二八五・二八七・二八九・二九一・二九三・二九五・二九七・二九九・三〇一・三〇三・三〇五・三〇七・三〇九・三一〇・三一〇

石上私淑言……………一四三
依存觀念詞……………一四七
以太利亞語……………一四三
いち(接辭)……………六九七
一音の活用形……………九六六
一段活用の動詞……………二五三・二五四・二五五・二五六・二五七・二五八・二五九・二六〇・二六一・二六二・二六三・二六四・二六五・二六六・二六七・二六八・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七三・二七四・二七五・二七六・二七七・二七八・二七九・二八〇・二八一・二八二・二八三・二八四・二八五・二八六・二八七・二八八・二八九・二九〇・二九一・二九二・二九三・二九四・二九五・二九六・二九七・二九八・二九九・三〇〇・三〇一・三〇二・三〇三・三〇四・三〇五・三〇六・三〇七・三〇八・三〇九・三一〇・三一〇

一關的……………一三九
一致……………一〇〇・一〇一・一〇二・一〇三・一〇四・一〇五・一〇六・一〇七・一〇八・一〇九・一一〇・一一一・一一二・一一三・一一四・一一五・一一六・一一七・一一八・一一九・一二〇・一二一・一二二・一二三・一二四・一二五・一二六・一二七・一二八・一二九・一三〇・一三一・一三二・一三三・一三四・一三五・一三六・一三七・一三八・一三九・一四〇・一四一・一四二・一四三・一四四・一四五・一四六・一四七・一四八・一四九・一五〇・一五一・一五二・一五三・一五四・一五五・一五六・一五七・一五八・一五九・一六〇・一六一・一六二・一六三・一六四・一六五・一六六・一六七・一六八・一六九・一七〇・一七一・一七二・一七三・一七四・一七五・一七六・一七七・一七八・一七九・一八〇・一八一・一八二・一八三・一八四・一八五・一八六・一八七・一八八・一八九・一九〇・一九一・一九二・一九三・一九四・一九五・一九六・一九七・一九八・一九九・二〇〇・二〇一・二〇二・二〇三・二〇四・二〇五・二〇六・二〇七・二〇八・二〇九・二一〇・二一一・二一二・二一三・二一四・二一五・二一六・二一七・二一八・二一九・二二〇・二二一・二二二・二二三・二二四・二二五・二二六・二二七・二二八・二二九・二三〇・二三一・二三二・二三三・二三四・二三五・二三六・二三七・二三八・二三九・二四〇・二四一・二四二・二四三・二四四・二四五・二四六・二四七・二四八・二四九・二五〇・二五一・二五二・二五三・二五四・二五五・二五六・二五七・二五八・二五九・二六〇・二六一・二六二・二六三・二六四・二六五・二六六・二六七・二六八・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七三・二七四・二七五・二七六・二七七・二七八・二七九・二八〇・二八一・二八二・二八三・二八四・二八五・二八六・二八七・二八八・二八九・二九〇・二九一・二九二・二九三・二九四・二九五・二九六・二九七・二九八・二九九・三〇〇・三〇一・三〇二・三〇三・三〇四・三〇五・三〇六・三〇七・三〇八・三〇九・三一〇・三一〇

一致組織……………一三三
一致關係……………一三三
一致組織の副成分……………一三三
一韻詞……………三

いづかた... 九二五
いづち... 九二五
五の「と」... 五七二、四七三
和泉式部物語... 四〇〇
いづれ... 九一五
いづれつゆけし... 一三〇一
いづれほどへぬ... 一三〇一
いづれまさり... 一三〇一
移動作用... 三〇八、三〇九、五六一
家... 一六、一七
います... 三三三
いませかり... 三六二
い韻... 九六二
インターロゲーションマーク... 一一九二
印度歐羅巴語(印歐語)... 八四、八四一
引用... 七六三、七六四、一一〇五、一一〇七、一一〇八、四四六

お... 六九五
おほ... 一八八四
おの... 九二五
おのづから... 二七三、二七五、二七六、二七九、二七五、二七六、二八三、二八四、二八五、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五
おのづから然せらるゝ... 二七二、二七四、二七五、二七六
おのれ... 九二五
おはす... 三三三、三三三、三三五
おハセリ... 三三三
大槻文彦... 二〇、三五、五三、七三、七九、一〇二、一三三、一四六、一四七、一五七、一五五、一七六、一八四、三三三、三三五、三六三、四〇三、四〇四、四〇五、四六八、四七六、四八八、四九〇、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五八三、五八六、六二二、六二六、六二九、六三三、六四九、六一六、二二二、二六四、三〇三、三〇六、三二〇、三二〇、三二〇、三二九、三二九

合體文	一七四
合同	一〇〇・三二二・三三三・三三四・三三五
合同形	一三七
合同的	一三六
合文(合句文)	五七・五九・六〇・六二・六六・一六六
二七二・二七三・四〇六・四〇七・四〇八・四〇九・四一一		
一四三・一四四・一四六・一四七・一四八・一四九		
一四九・一四〇・一四二・一四三・一四四・一四五		
一四八・一四九・一五〇・一五一・一五二・一五三		
一四九・一五〇		
がまし	七三
がる	七三
キ		
き	三九・三九・四〇・四〇・六八・六九・九六・九六・九六
九七・九七・九八・九八・一〇四・一〇五・一〇七		
器格	八五・八四
希求	一〇六・一〇六
歸結句	六七八・一〇七〇
記載語	二・一〇四・一・三九
記載法	二・三六・三五七
著す	九五六
著せしむ	九五七
基本数	二〇五
基本點	五七二・五七四
木下子之吉	一三五
希望	五三・八〇・九〇・〇六・二二九
希望喚體	二九・三三・三三・三三・三三
一三五・三六・三七・三〇		
希望體	六四・一三・一三
希望の終助詞	一三三
希望の對象	一一〇
共同	三〇
共同性作用	五六
曲調	六六・八五・一〇七・一〇七・一〇七・一〇七
二七二・二八二・二九四・一四三・一四四・一四九		
一四九		
居言	三三
居體言	一四四
虛體言	四一・四三・四五
許法(許容法、許容述法)	一〇六・一〇六・一〇六
許容	一〇六・一〇六
許容述法	一三・一三・一三
許容法	一四〇・一四〇
許容體	一五五
禁止	六二・六三・六三・六三・六三・六三・六三
一四三		
禁止の副詞	六・六二
近稱	一八九・七四一・九六
キ		
擬喚述法	一三・三三・三三・三三・三三
疑辭	六六
疑法	一〇六
義務	九六・一四〇
義務體	一四三
疑問	三九・二・三二・六四・六九・三三九・二八九
一四〇		
疑問體	六四・六四・一六九・一九七・二四五・二四六
一四〇		
疑問代名詞	八八・八九・八七・九五・九六・一九三
疑問副詞	六三・九五・九五・九五・一九三・一九三
疑問文	一九二・一九五・一九六・一九八
希臘語	八三九・八四三
ク		
句	六四・四八・六三・八九・九六・九六・一〇四・一〇五
一九七・一九八・一九九・一〇七・一〇七・一〇七・一〇七		
一六一・一六一・一六一・一六一・一六一・一六一・一六一		
一七三・一七四・一七五・一八四・一八六・一八七・一八九		
一九〇・一九一・一九六・一九八・一九九・二一一・二一一		
一九七・一九九・二〇〇・二〇〇・二〇〇・二〇〇・二〇〇		
活動語族	四
活用	四九・五五・五六・一三八・一四三・一三三・一三三
二六〇・三七		
活用形	三三・三三・三三・三三
活用言	四一・四四
活用の詞	三三
關係	八・六四・六四
關係語	一五五・一五六・一五七・一五八・一五七
關係詞	一四九・一五〇
關係指示	九七・九八・九九・九五
關係代名詞	八八・八九・九〇・九〇・八七・二六
一四二		
關係的語法	一〇〇・一〇三
關係副詞	九五・九七・〇四・一〇九
完結終止	二七〇・四九五
冠詞	五七・五九
喚體	一一〇・一一〇・一一〇・一一〇・一一〇・一一〇・一一〇
二二八・二二九・二三三・二三三・二三三・二三三・二三三		
二六四・二八八・二八八・一三〇・一三四・三三九・一四三		
一四七・一四八		
喚體句	八六・八六・二九八・二九八・二〇二・二〇五
二〇九・二二八・二二九・二三三・二四六・二五七・二五九		
二五九・三〇一・三〇三・三三九・三三九・一四二七		
一四三・一四六・一四六		

一三六・一三五・一三六・一三七・一三七・一三七・一三六		
一三七・一三九・一三九・一三九・一四〇・一四〇・一四〇		
一四二・一四二・一四二・一四二・一四二・一四二		
空間	八六
九格	四二
草野清民	八六・二八・三〇・三三・三四・四九
四三・四三・一〇六・一〇七・一一一・一一一・一一一		
一三四・一三五・一四三		
くしき活用	三三・三八・三三・三四・三三
風曲	八〇・八一
句點	一六八
句讀	六七・二六七・二六八
句の構成	一〇一・一〇三
句の構造の單複	一一〇
句の骨子	一三一
句の終結	八六
句の終止	二七〇
句の修飾語	八八・二五三
句の性質	一九〇・一三七・四〇〇
句の組織	一三九・一三三・三〇九
句の組織論	三九九
句の體	二五八
句の特性	二五八
句の用	一五八
九日	四・四二
くしがし	七四〇
黒川春村	三〇二
黒川眞頼	八七
黒澤翁滿	三五六
句論	三・八九・一一七・七〇・二五四
一五五・一五六・一五八・一六〇・一六一・一六六		
二七二・二七四・三二二・三三三・三三三・三三三		
廣日本文典	一五・六六・六七・三四九・四七九
四八四・五三		
廣日本文典別記	八〇・二〇四
回想	四六・四三・四三
回想作用	四三〇
回想をあらはす複語尾(回想の複語尾)	三九〇・四〇八・九四四・九六〇・九七九・一〇七三
一〇七五・一〇七六・一〇七・一〇〇・一〇八五・一〇八七		
過去	三九五・四〇九・四一一・四一八・四一九・四二〇
四三二・四三三・四三六・四三七・四三八・四三〇・四三三		
四三七・四三八・四三九・四四〇・五二〇		
過去分詞	二六六
擴張的の句	一一一
活語	三三・三四・三三
活語指南	二八・二九・三七・三六〇
活動語	五・八〇・八一

喚體の重文 一四三
喚體有屬文 一四七
完備句 一四〇・一四一
觀念 一六五
觀念語(觀念詞) 一四九・一五〇・一五一・一五二・一五三・一五四・一五五

形式形容詞 三三・三三・三三八・三四・三四五・三四五・三四五
形式動詞 三三・三三・三四・三四・三四五・三四五
形式體言 一七・一七・一七九

- 現在分詞 二六六
- 限定詞 三
- 言文一致 九九
- 言文一致の文例 九九
- 幻裡庵 一〇六
- コ**
- こ(代名詞) 九三・九八
- こ(接辭) 六九五・六九六
- 乎 三五四・三五五
- 後詞 五〇・五一
- 恒 四三・四四
- 恒意の配列 一三五・一三六
- 後件 一〇七
- 恒時 四三・四四
- 後退的接續詞 一八
- 後置詞 一九
- 呼應 五三四
- 呼應(應答)の修飾語 一三三
- 古格 五三
- 呼格 八〇六・八〇七・八〇八・八〇九・八一〇・八一一
- 呼格の語 一三三・一三六・一三九・一四三・一四七
- 呼格附屬の助詞 一一〇
- 古格派 八四
- 古今集 二七・一五〇
- 國語 三四・一八五・一九八・二七〇・二七三
- 國語學 一〇
- 國語學書目解題 一九五
- 國語記載法 九四三
- 國語四大綱 五三七
- 國語の性質 九一八・三
- 國語の本質 一一二・二八
- 國文 九
- 國文法 三七八・三九九
- 國民心理 九六三
- こし 六二・六四・六六・六七・六八・六九・六九六
- こそ 六三〇・六四〇・六五〇・六五八・六六六・六六七・六七八・六七八
- こそは 一〇五九・一一三・一一四・一一七・一一七三
- こそと 一三三・二七九・二八〇・二八八・四〇五・四四九
- こと 一三〇
- ことば 六七四
- ことそや 六七四
- こと 六八
- 事 三三
- 詞の秋草 三九九
- 詞の大綱 三三
- 詞の經緯圖 三八・三九
- 詞の通路 二七・七八・五三
- 詞の玉緒 一四三・四〇三・四〇六・六二・六七・六九
- 詞の玉緒 六二・六七・八三・八五・八六・一〇三・一〇四・一九〇
- 詞の玉緒 一九四・一九五・一九六・一九七・一九八・一九九・二〇〇
- 詞の玉緒 一三〇・一三三・一四七
- 詞のつかれを 二五八
- 詞の眞澄鏡 三六・二七
- 詞の八衢 二七
- 理 三七
- この 八七三・九三六・九九七
- こは 九三九
- 請 九九
- 個物的判定 六四二・二六・二六五
- 個別 一〇〇・一三三・一三三・一三四・一三五・一三六
- 個別の 一一三
- 個別同格連用 一三三
- 固有語源 一〇五・二八・三〇・三六・六九九
- 固有語 三三〇
- 固有名 三四九

- 固有名詞 六四三
- 古來の學說 六
- 孤立語 五・八八
- 孤立語族 四
- これ 九三・九三七
- 混一同格連用 一〇三・一〇三
- 根語 一八〇
- 混體動詞 三二
- コトイフ符 一三
- ク**
- く 六九五
- 語 二六・七〇・七七・七五・五三・五三六・九〇八・二五八
- 語意考 一四二
- 語幹 三三三・三四六・三九九・三四四・三四五・三四五
- 六九三・七〇〇・七〇一・七〇二・七〇四・七〇五・七〇七・七〇九
- 七三九・七六七・八九六・一〇四七・一〇五七・一一二
- 語學 二六
- 語學指南 六四
- 語學新書 四三
- 語學自在 三七・七八・七九・四〇三
- 語氣 四九四・四九五・四九六・四九九
- 語形の變化 四六
- 日本文法論索引
- 語句の省略 一二三
- 語根 七七・七八・八八・三三・四六九・四七・四七六
- 語辭 二八・三九・三〇・三二
- 五十音圖 二五三・二五八
- 語順 一八
- 語性 六
- 語性篇 六七・七二・四六五
- 語調 六八四・一六四
- ごと 五五九・五五二・五五七・五五八
- 如くに 三二六
- ごとし 一六六・一六七・三三・三五四・三五五・五四三・三三
- 九四三・一四六六・一四八四
- ごとし(例示) 三三五
- ごとに 五四三
- 語の運用 一一三
- 語の運用研究 一一五
- 語の運用論 七七
- 語の相關の範疇 一一三
- 語の集團を助ける助詞 一一〇
- 語の順序 六四七・二三五
- 語の性質論 二九
- 語の配列 一三四
- 語の複合 七一
- 語の副詞 五一・五三・五五
- 語の位格 八〇五
- 語法 五九
- 語法私見 二九〇
- 語法助動詞 一一三・一一四
- 語法の照應 一四九
- 語法の副詞 四九
- 語尾 四六・五〇・五五・五九・一一・一一二・一五八・一六三・九四三・九四四
- 語尾變化 一四四・四〇三
- 語類 六〇
- 語論 三八・九一・〇二・四九・一一七・二五八・二五九・二六〇・二七〇・二七四
- 權田直助 三七・六〇・六七・六八・六九・七四・一四六・三三三
- 三三七・三七五・三七六・七八・三八〇・三三三・四〇三・六一七
- 六八
- サ**
- さ(副詞) 七五・七五・八三・八三・一〇九〇
- さ(接辭) 五三・六九・七〇・一〇三・二〇六
- 一〇七・一〇八・一〇九・一一四・一一五・一一六
- 再歸動詞 三〇五
- 再歸的提示語 一三六
- 再歸的獨立提示語 一三七
- 再歸的連結提示語 一三七

最上級	六六	「左の如き」	八三三
再度の語尾	六六三	さはれ	一〇七四
想像	四三〇	挿入文	一四〇四
裝助詞	五七八	さふ	七〇四
雙聲	三五三・六三〇	さへ	五七七・五八四・六二八・二一六
裝定	八七・六六九	状態	三三五
相の助動詞	三四・三三一	作用	三四・二八・三三五
裝法	一〇七	作用語	二八・三〇・三八・二六二・三六・三七〇
相伴主	一三三四	作用語	三五〇
相伴主格	六三八	作用の詞	二・三三・三五・六・七
相伴事實	一〇七四	さり	七五・九〇七
相伴事實前提	一〇七四	されば	七五一
相伴前提	一〇七四	サンスクリット	八四一
相伴前提法	一〇七〇	三代集	一三五三
相伴實	一三三四	三段活用	三五・三三・三六九・六六五・九五〇
佐行三段	三二四	三段落の歌	九五三・六二〇・〇六二・〇六二・一三三・二四九・二八一
佐行變格	六二・一六七・三三四・三七・三八・三三一	三轉結	二二四
さす	三三	散文	一三四三
さす	六四・七八二・八〇三・八〇四・八五六・九五三・九五四・九五八・九一・九五三	雜	三九
させ	一四一五	ざらしむ	九九八
させらる	九七六	ざらしむばかり	一〇〇二
さて	九〇八・九六八		
佐藤誠實	三九九・四六八・六四		

サ

シ

しからば	七五一	詞尾	四六四・七四八・五・八八
資格を示す接辭	六九九	鬮尾屈曲	八六・八八・九六
しかり	七五・九〇七	集合意識	一一八八
しき	九六四	しむ	三八四・七八二・八〇四・八〇五・八五六・九五三・九五四・九五五・九五六・九五八・九八一・九八三・九八四・〇〇五
詞句	一一六七	しめ	一四二五
しくしきの活	三三・三三四・三三〇	しめさす	九七七
思想	一三・六七・七〇・七一・二八三・二八七・二八九	しめらる	九七六
思想式の時	四三三・四三四・四三六	しも	七五九・七六・六八八・二四〇四
増詞	四六・六四	しも	三三・三八・六二・三四・五八・三七
指示	三九・一八七	下一段活用	三三・三八・六二・三四・五八・三七
しし	九六四	下二段活用	三八・三三・三四・三五・六八・九五・九五二・九五三・〇八三
し、か	九六四	社會	一一八
指示言	四二・四三・四四・四五	將然言	一六一
指示代名詞	八八・八九・九二	省略	一四九五
四種の活	二八	省略終止	六七〇・六九〇・九六
自然勢	三七〇・二〇六	省略述語	六六六・二八二・二八三・二八四・二八五
自然動詞	一九五	省略準體言	七四
自然の配列	一三五五	省略體	一一〇・一二七・二八四
七日動詞	四五	終結	五三〇・八六五・一〇五七・一〇七三・〇九六
して	三四八・七四八・七〇・七九・八三七・八三・八〇	終結の形	一一五九・一六〇・二二九
支那語	四・五八・八四三	終結の用法	八六四・一〇五五・一〇五七・一〇七三・二五七
指定文	一九五	終止	二四三・二四四・二四五・二六・二六八・三六・三四・三六・三七・三九・三四二・三四八・三五八・三六・四二・四四五
指點的判定	六四三・二六〇・二六二		

四語詞 三三

新語法 二九八

心的作用 三三

心理學 三九

新和獨辭典 五八三

じ(複語尾)..... 四五五、四五九、七三六、九九九、九九九、九九九、

一四八、一〇七六、一〇七八、一〇八八、一四一七

じ(接辭)..... 七〇一

自..... 二七三、二七四、七九三、七八三、三三〇〇〇

辭...三三三、三三三、三三六、三三七、三三八、三九〇、六六六、九九七〇

爾..... 三五四、三五五

辭彙學..... 一

辭格考..... 四〇三

時間..... 四二一、四二六、四四六

時間式的動作式..... 四三四

時間式..... 四三三

自我..... 三八〇

自己移動..... 三六〇、三六二

白國語..... 六

自己動詞..... 二九五

事實前提..... 五三〇、四三五、四五六

自稱..... 一八八、一九六、一九七、七四〇、七八五、九三三、九三八

主觀的形式體言(代名詞)..... 一七九、一七九

主言動詞..... 二八九

主言文..... 一六九

主語..... 一九九、一九九、一六八、二六六、四九三、四九六、五〇八、五五一、

五五八、五五九、五六〇、五六六、五六七、五七〇、五八一、五九一、

六〇〇、六〇四、六四二、六四六、六五〇、六五二、六六六、六六八、

六六六、六九一、七〇一、七七七、八〇九、八一二、八二二、八一三、

八五八、八六八、八七八、八八〇、八八四、八八五、八八六、八六六、

八七六、八七七、八七八、八八二、八八四、八八四、八八五、八八五、

八八五、八八五、八八五、八八五、八八五、八八五、八八五、

一〇五三、一〇五三、一〇五三、一〇五三、一〇五三、一〇五三、

一七四、一七五、一七五、一七八、一八三、一八七、一九〇

一九九、一九九、二〇〇、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇四

二〇六、二〇八、二一一、二二八、二三八、二九三、二九九

三三八、三三九、三三九、三三九、三三九、三三九、三三九、

三六三、三六三、三六三、三六三、三六三、三六三、三六三、

四〇一、四〇一、四〇一、四〇一、四〇一、四〇一、四〇一、

四三九、四三九、四三九、四三九、四三九、四三九、四三九、

四九六、四九六、四九六、四九六、四九六、四九六、四九六、

五五〇、五五〇、五五〇、五五〇、五五〇、五五〇、五五〇、

一六四、一六四、一六四、一六四、一六四、一六四、一六四、

主語句..... 一六四、一四九

主辭..... 四九六

主者..... 八七、八八、八九、九〇、九一

自稱の文..... 二九七

次屬(從屬ともいへり)..... 一三二、一三三、一四五

次屬關係..... 一三二

次屬接續詞..... 一〇四

次屬組織..... 一三二、一四七

自他..... 二七二、二七三、二七四、二七六、二七八、二八九、二九二、

二九九、二九八、二九八、三〇〇、三〇三、三〇八、三二八

實有條件..... 一四九

實字..... 六六

實動詞..... 九四

實實用言..... 二七〇、三五〇、三〇三、三五三、三五二、七八八、八九九、

八九二、九二一、一〇三三、一二六八

實體言..... 四一、四三

實體言(名詞)..... 七七、七九、八二

實然斷定..... 五〇一

自動..... 二八五、二八六

自動詞..... 九七、二八九、三二九、三七七、三七四、三七五、三八〇

事物の指示..... 一九一

事物の代名詞..... 一八九、一九〇

十進單位..... 二二五

十品..... 四二

十二身..... 三六、四〇

じもの..... 七〇

常級..... 八六

主從..... 四九九

主從複合..... 二七三、七三一、七三四、七三五、七四〇、七四二、

七四三

主素..... 七〇、七一

主體..... 七七四

主語..... 六八九

主部..... 六三、四八、一九二、一九三、三三三

主文..... 一四六、一四六、一四七、一四七、一四七、一四八、一四八、

一四八、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、

趣味識..... 四七四

主位..... 四九六、四九七、五〇〇、五〇六、四八八、三二一

主位觀念詞..... 四七

春樹..... 四〇一

春樹顯秘抄..... 四〇三

稱格..... 七八六、三九七

稱格指示代名詞..... 一八七、一八八

稱格代名詞..... 八九、七八四

稱謂..... 一三三、一四〇

所相..... 二七五

初體用令助..... 一四二

初等日本文典..... 六七、四二、一二三

所有代名詞..... 八七、九六、九九

使令..... 五八、九六、九七

使令作用..... 三八一、三八二、三八四、三八八、五〇〇

上句..... 一〇〇、四〇八、四二二、四四四、一四一、一四六、

一四七、一四八、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、

一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、

一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、一四九、

上辭..... 三九、四〇、七四

情態..... 八四、八六、一〇五

狀態性間接作用..... 五八、七五

情態副詞..... 四八、五〇、五二、五三、五五、五三、

五三、五三、五三、五三、五三、五三、五三、

六三、七〇、七七、七八、八九、八九、八九、八九、

九四、九七、一〇九、一〇九、一〇九、一〇九、一〇九、

一〇九、一〇九、一〇九、一〇九、一〇九、一〇九、一〇九、

情態副詞の範圍..... 三九

情態の修飾語..... 八八、八九、一二三、一二三、一二三、

一三六、一三六〇

上段一..... 三五七

上段三..... 三五七

上段四..... 三五七

上段二..... 三五七

淨瑠璃..... 一三四九

若..... 三五五

從屬..... 一〇〇、一〇七

從屬成分..... 四八四

從屬組織..... 一三一、一三九、一四〇、一四三、一四八、

一四八、一四九〇

- 西班牙語……………八四三
- すら……………五七六・五八三・五九九・六三〇・二一六
- 推測……………四〇〇・五三一
- スキート……………七六・七九・八二・八九・一〇〇・一一〇
- 一三三・三七・四〇四・四二五・四三八・四三〇・四三二・四三三・四三三
- 四三七・四〇五・二・五五・五二一・二六五・二八三
- 推量……………一四三二
- 推量體……………一四四五
- 推量の複語尾……………五九〇・四四三・九八二・一〇七三・一〇七六
- 一〇七七・一〇八〇・一〇八三・一〇八五・一〇八八・一〇九六・一〇九五
- ス**
- す(形式動詞)……………三三三
- す(否説の複語尾)……………四四四・四九六・六八〇・七四九
- 八九八・九五九・九九〇・九九一・一〇四三・一〇四五・一〇四七
- 一〇五〇・一〇五五・一〇七三・一〇七六・一〇七八・一〇九〇
- 一〇八三・一〇八五・一〇八八・一〇九四・一〇九五・一〇九七
- 九九〇・九九四・一〇四六
- すて……………一四四五
- 性……………七九八・八二二・九八二・二五
- 聲音……………一・二三
- 聲音學……………二
- 聲音論……………二
- 正格……………二五六
- 靜辭……………三三・三四・三六・六八・六九・一七〇・一七四・一五〇
- 一五八・一五九・一九九・四〇三・四四八
- 性質……………六四三・六四四
- 性質の副詞……………九五
- 精神の統一作用……………一六一
- 正體言……………六九七・七〇七・七一四・一五八・一五九
- 靜定的作用……………三〇八
- 靜的研究……………四六三
- 靜的補語……………八五五
- 靜的目標……………五六一・五六四
- 西洋語……………五九六
- 西洋文典……………五六一・一〇一・一三三・三六三・三九四・四〇
- 四二五・五三三・五三三・五九六・六〇六・六四四・六六六・六六六
- 一〇〇・一〇一・一〇三・一〇七・一一八・一一九・一二三・一二三・一三四
- 一五六・四七四・四八四・四九二・一四四六
- 西洋文法……………五九
- 西洋模倣文典……………四〇
- 勢力……………三〇〇・二六六
- 小學日本文典……………四三
- 小數……………一〇七・七三
- せき……………九三
- 昔世祖著の文……………三九九
- 關根正直……………一二九〇
- せさす……………九七六
- せし……………九六四
- せしか……………九六四
- せしむ……………九五六
- 節……………一四八三
- 設想……………四四一
- 設想的語法……………四三八
- 接辭……………七七・七八・九六・一八四・一八五・二〇八・二二〇・二二五
- 二四六・二四八・二四九・四四五・六三二・六七七・七二二・七四八・八三三
- 八二六・一一〇・二〇三・二〇六・二一三・二一七
- 設述語……………四九六・四九八・五七七・三三三
- 設述部……………四八八・五七七・一三三三
- 接説……………四四〇
- 設説……………五三〇
- 設説的……………五三一
- 設説法……………一〇七・一〇六
- 接續……………三九・五三
- 接續格……………九〇五・九〇六・九〇八・一三九・一三六・三三九
- 接續形……………八六・一三九・二六〇
- 接續言……………四二・四三
- 接續語……………九〇五・九〇八・一四〇・一四〇・一四四・一四四
- 接續詞……………一六・二三・四四・四五・四九・五〇・五三・五三・六六
- 五七・五九・六〇・六二・六三・六四・六六・六九・七四・七九・七九・一〇〇

- 一〇一・一〇三・一〇四・一〇五・一〇七・一〇八・一〇九・一一〇
- 一一二・一一三・一一四・一一七・一一九・一二一・一二三・一二三
- 一二四・一二六・一二七・一二八・一二九・一三〇・一三一・一三二
- 一三五・一五五・一五九・一八三・一八四・一八五・四二・五三
- 五二四・六〇三・六〇五・七五三・一〇五二・一〇五三・一〇四・一四八〇
- 一四三三・一四四・四〇五・五五五・六〇二・六一四
- 六七七・六七九・六八七・七三三・八七九・一〇六九・一〇七四
- 一〇七八・一一〇〇・一一四五・一一四九・一一五・一一九三・一二九四
- 一四〇六・一四〇八・一四二八・一四四五・一四四八・一四五一
- 接續法……………一四四八
- 接續的副詞……………一一二・二一八
- 接續副詞……………五三三・五三五・五三三・五三八・六五三
- 七七・七五二・七五五・九〇・九〇六・九〇七・九三九・一〇九九
- 一三三
- 折衷説……………五三
- 折衷文典……………六七
- 接頭語……………一六
- 説動用詞……………三三・三三・三三
- 接尾語……………一六・一七・二一・二二・四六・四六・四六九
- 四七一・四七六・四八〇・五〇四・五〇四・五〇四・五〇四・五〇四・五〇四
- 五八一
- 説容體詞……………三三・三三
- 説明語……………四九六・一〇四・三三二
- 説明體……………二四三・二四三・二四三・二四三・二四六
- 日本文法論索引
- 説明動詞……………三三三・三六二・四四四・五〇二・五〇九・五〇〇
- 五三三・五三六・六〇〇・七七三・七七八・八六八・八五四・八七六
- 九〇三・九〇四・九三三・九三九・九四三・九五三・九五三・九六〇
- 九六六・九六六・九六六・一〇〇五・一〇〇八・一〇三三・一〇三三・一〇三四
- 一〇七・一〇六三・一〇七一・一〇七九・一〇八三・一〇八四・一〇八六
- 一〇九二・一〇九二・一一二・一一四・一一三・一一五・一一三
- 一三三・一四三
- 説明部……………六三
- 説話法の副詞……………四九四・四九九
- セミコロソ符……………一一二
- せらる……………九七六
- せり……………一六六・一六七
- 先行副詞……………五三・五三
- 潛主語の句……………一四〇
- 選擇(代名詞)……………一九三
- セ**
- 絶對指示……………九二七・九二八・九二九・九三四
- 然……………三三・三三・三三・三五
- 前行句……………二四二・二四三・一〇七四
- 前行事實……………一四二六
- 前行條件……………一四三六
- 前句……………八二五・八二六
- 前置詞……………四一八・四二五・五八・五九・七九・八二・八三
- 八四・九七・一四九・一五〇・三二〇・五七七・五七三・八三九・八四四
- 前提……………六〇三・一〇六九・一〇七三・一〇七四・一〇七八・一〇八一
- 一〇〇・一四〇
- 前提句……………六七八・八六七
- 前提の用法……………一〇五五・一〇九七
- ソ**
- そ(代名詞)……………九三三・三三八
- そ(助詞)……………六五五・六六六・一一三・二七九・二八〇
- 一一八一
- そ(接辭)……………六九四
- 總合……………八・九六・六四
- 總合的研究……………三・八・四六四・四六七・七〇六
- 總合的言語……………四
- 叢語……………一九四三・四四・九二・九五・一六七
- 總主……………一三三
- 總主論……………一三三
- 促音……………九七一
- 促音便……………九七一・九七二・九七三・九七四
- 韻辭的用法……………六〇七
- 組成的連體語……………一三五九・一五六〇
- 外……………三〇〇
- その……………八七三・九三六・九三七
- そは……………九三九

- それ……………九三三・九三七
- それがし……………七四〇
- それに……………九三九
- 存在詞……………三〇
- 存在動詞……………三六六・三四七・三六六・三六九・四〇六・
- 六五八・六六〇・六六三・七二二・七七七・七七九・七三二・
- 八二八・八七六・九四三・九六〇・九六三・九六五・九六六・九六八・
- 九六九・九七一・九七三・九八四・一〇三三・一〇三六・一〇三八・一〇三九・
- 一〇三三・一〇三三・一〇三七・一〇三九・一〇四一・一〇四六・一〇四八・
- 一〇六三・一〇七二・一〇七九・一〇八二・一〇八三・一〇八四・
- 一〇八六・一一三三・一一三四・一一三六・一一三五・一一四八・一一四九・
- 一一四四・一一四二
- 存在動詞の性を有せる複語尾……………九九五・九九八
- ぞ……………六〇三・六二二・六四四・六六六・六八八・六八九・六六六・
- 六三七・六四一・六五〇・六五五・六五六・六六八・六七九・六八三・
- 八〇四・一〇九九・一一三〇・一一三三・一一三四・一一三八・一一三九・
- 一一四〇・一一七二・一一七三・一一七八・一一八八・一一八九・
- 一一四七・一一四九
- 属……………一六三・三三
- 属格……………八四一
- 属句……………八五八・八六六
- 属詞……………三三三・三四・三六
- 属性……………四九五・四九八・五〇二・五〇一・八八四
- 属性観念……………九二・九四
- 属性観念詞……………四七八
- 属性の作用を助くる複語尾(間接作用をあらはす複語尾)……………三六七・九四四・九五三・九八四・九九六・
- 一〇〇四・一〇〇五・一〇〇七・一〇〇八・一〇〇九・一〇一〇・一〇一一・
- 一〇一二・一〇四三・一〇四五・一〇五六・一〇六六・一〇七三・一〇八〇・
- 一〇八二・一〇八四・一〇八七・一一五〇・一一五二
- 属性詞……………三八九・四〇七
- 属性副詞……………五〇一・五〇二・五〇三・五〇四・五〇五・五〇六・
- 五〇八・五一一・五二五・五三九・五七七
- ぞなむ……………六七三・三〇〇
- ぞは……………六七三
- ぞも……………六七三
- ぞや……………六七三
- ぞやも……………六七三
- た(代名詞)……………八七・九三四
- た(話語の複語尾)……………九六九・九七三
- た(接辭)……………六九四
- 他……………三七三・三七四・三七九・三八二・三八三・三八四・
- 三三三・三四・三六

- 倒置法(轉置法)……………二〇
- 他我……………三八〇
- 高橋金一郎……………一〇五・一〇六・一〇八
- 多行四段……………九七一・九七二
- 擇一……………六六四
- たぐひ……………一七
- 手繰の糸……………三三七
- 他稱……………一八八・七四一・七八五・七八六・九三三・九三八・九三七
- 他稱の文……………一三九
- 徒……………六七六・六八
- 徒の結……………一三〇・一三二
- たち……………六九八
- 橋成員……………一四二
- 立ち……………一七
- 他動……………三八五・三六六・三〇九
- 他動詞……………九七・二八九・二九〇・二九二・二九三・二九四・二九五・
- 二九六・二九七・二九八・三七三・三七五・三七六・三〇
- 田中義廉……………四五・五〇・五二・五三・五七・五九・六四・
- 一五五
- 谷川士清……………一四〇
- 他に然する……………二四五・二七二・二七三・二七四・二七六
- 他に然せざる……………二七三・二七四・二七五・二七六
- 他に然せらる……………二七三・二七四・二七五・二七六
- 玉霞……………三九
- 玉の緒延約……………一〇四
- 玉の緒線分……………二八・二九・六三・一〇三
- たり(説明動詞)……………一六六・一六七・三三三・三五五・
- 四〇一・五三六・七四八・七八九・九〇〇・九〇一・九〇四・一〇三三・
- 一〇三三・一〇三三・一一四・一一三
- たり(接辭)……………六九九
- たれ……………六〇・九四・一五〇
- 短歌……………一二四
- 單句の文……………一三八・一四〇・八
- 單語……………三八・五三・五五・六二・七四・七五・七六・七八・
- 九三・三四・四六・四六・四六・四六・四六・一五九・一七〇・
- 一八三・一八七・一三六
- 單語の總合的説明……………七七
- 單語の分解的説明……………七七
- 單語法……………一七〇
- 單語複合……………一〇〇
- 單語分類……………一三
- 單語分類法……………一三・七四
- 單語類別……………五九・六三
- 單語論……………一三三・一七〇

單體文……………二七四・二三三
 單獨前提法……………一〇七〇
 單文……………二九・四九五・四九六・二六六・二六九・二七〇・
 二七二・二七三・二七四・一七五・二八三・一八四・一八五・
 二二三・二二四・二三〇・二三二・二三三・二三三・二三四・
 一三七・三八八・三八九・三九〇・三九二・三九三・三九四・
 一四八・一四〇九

夕

第一曲調……………一〇五九・一〇六〇・一〇六一・一〇七二
 第一語尾……………三六四
 第一稱(自稱)……………一八・一九・七八七
 第一人稱……………一八九
 第一類の且爾乎波……………八四・一六〇・四七七・四七八・
 四七九・五八二・六三五
 第三者……………九九・一二五
 第三稱(他稱)……………一八・一九・七八七
 第三人稱……………八九・一八・一八九
 第三人稱代名詞……………三〇五
 第三類の且爾乎波……………六四・二二・二六・四〇五
 第四格……………二九二
 第四格の目的語……………二九〇・二九一
 第二曲調……………一〇五九・一〇六〇・一〇七二

チ

第二者……………八〇九
 第二稱(對稱)……………一八・一九・七八七
 第二人稱……………八九・一八九
 第二類の且爾乎波……………六二・一〇・二四・七五・
 六二・六三五
 代表準體言……………七七五
 代名詞……………一六・九・二三・四一・四四・四八・五八・五九・
 六〇・六五・七九・八八・九三・九三・一四九・一五五・
 一五五・一五九・一七八・一七九・一九八・三三四・五二七・五二八・
 五五・六九七・六九八・七二二・七二二・七二九・七三九・七五七・
 七八四・七八六・八二一・八二二・八二九・八二九・八七二・八七二・
 九三三・九三三・九三六・九三六・九三九・九三九・九三五・九三七・
 九三九・一三三・一三三・一三三・一三三・一三七七
 濁音……………三九・八三・八三・九六・九七〇
 大空春臺……………一六八
 だつ……………七〇四
 奪格……………八四一
 だに……………五七六・五八三・五九〇・六二八・一四一
 だも……………七五八
 段……………二五三・二五八
 斷言……………五三〇
 斷言の副詞……………四九〇・四九三
 男性……………一八九
 斷定(判定、命題)……………四三三・四三三・四九五・四九六

四九九・五〇〇・五〇一・五三〇・五三五・六四一・二〇五・一四三

ち……………六九九
 知覺……………二六五
 秩序の修飾語……………一三九
 長音……………八三
 長呼音……………八六七
 長秋記……………四〇
 中右記……………四〇〇
 中古文法……………七八〇
 中止……………八六七
 中止述法……………七七・一〇九・二八三・二八六・二八七
 中止的語法……………九六
 中止の形……………八六・九六・二四三・二六二
 中止法……………一〇七・一〇八・一〇九・一四一・二〇・二四一・二四二
 一〇五
 抽象的の名詞……………八二
 抽出的提示語……………一五六
 抽出的獨立提示語……………一三六
 抽出的連絡提示語……………一三七
 中性……………一八九
 中性時……………四三
 中稱……………一八九・七七一・七六六

中段……………二五七
 直行式……………五
 直行式の言語……………四
 直感的判定……………六四三・二八〇・二六〇・二六三
 直接引用……………七六四・八八二・一〇五・四六九・四七四
 直接客語……………八五五
 直說法……………四四〇
 直接表象……………四三・四三八・四四〇
 直接賓……………八三八
 陳述……………二六六
 陳述語……………一五六・一五七・一五八・一五八
 陳述の修飾語……………二二七・二二九・三四一・一五一・
 一四六・一四七
 陳述の確めをあらはす複語尾確述の複語尾……………
 三九〇・九四四・六六・九四・九〇・九一・九五・一〇四三・一〇六六
 一〇七二
 陳述の方法に関する副詞……………五五
 陳述副詞……………五〇三・五〇四・五〇五・五〇六・五〇七・五一一・
 五二四・五二五・五二九・五三八・五九八・六三四・六三三・七二二・八八八・
 八八九・九三・九三・九三・一〇九〇・一〇九六・一三五七
 陳述副詞の範圍……………三三六
 持格……………八〇・五五三

チ

地藏十輪經……………四〇〇
 重句文(重文)……………二七一・三三八・四〇六
 重語形……………二四一・六二二・五
 重文(重句文)……………二六二・三四八・三九八・五七七・四八・
 七四九・七五〇・九八八・九四四・九九五・一〇三四・一〇四〇・二六六・
 二七二・二四〇・二四二・一四二・一四二・一四四・一四四・一四五・
 一四一六・四七二・四一八・一四二九・一四三〇・一四三二・一四三三・
 一四三三・一四三四・一四三五・一四三七・一四四二・一四四八・一四七七・
 一四八二・一四九六・一四九七
 重文前提……………一〇七・一〇七・一〇三・一〇七三
 重文の省略體(省約體)……………一三〇
 女性……………一八九
 ツ……………
 つ……………三九〇・三九三・三九五・六八〇・七三三・七三三・八八八・九六六・
 九六七・九六九・九七三・九七四・九八四・九八五・九八七・一〇〇九・一〇四〇
 一〇四七・一〇五三・一〇五五・一〇五六・一〇六六・一〇六七・一〇七二・
 一〇八二・一二五〇・一四一九
 通格助詞……………五八七・五八八
 通常稱……………七八四
 通用……………三九
 つゝあり……………六九九・七三三・一〇五三・二八六・二八七
 つゝあり……………七三四
 つべかり……………九九三・九九六

テ

つべし……………三九五・三九六・三九七・九九五
 つめり……………九九三・九九六
 つめりき……………九九六
 つらし……………九九四
 つらむ……………九九三
 鶴峯戊申……………三六・四〇・四三・五三・五五・六三・七九・一〇〇・
 四六五・四〇
 ツ……………
 づから……………五四六
 て……………一八・三九八・三九九・四〇二・四〇三・四〇六・四六五・六二二・六七・
 七四九・七五五・七五七・七五八・九六八・九六八・九七一・九九〇・
 九九四・一〇〇一・一〇〇一・一〇〇三・一〇四三・一〇四三・一〇四六・一〇七
 一〇七二・一〇七三・一〇七三・一〇七三・一〇七三・一〇七三・一〇七三
 定格助詞……………五八七
 定格辭……………五八七・六三八
 定言法……………一〇七七
 提示語……………一三六八・一三七〇・一三七
 提示的語法……………一三六八・一三六八・一三六九
 定稱……………一八九・七八五・七八六・一三九九
 程度……………八八四・八八六・一〇五三
 程度の修飾語……………八八七・二二七・二二七・一〇三二・一〇三二・
 一三三

英語の部

A.

- Ablative 839, 841, 842
Accusative 841, 842
Active 288
Adjective 79, 84, 868
Adverb 79, 91, 121, 483
Adverbial clause 1481
Adverbial phrase 466
Adverb of assertion 490, 494
Adverb of order 91, 519
Analysis 708
Attributive verb 59
A word sentence 133, 1177, 1179, 1182

C.

- Case 79, 552
Clause 1167, 1168
Complete meaning 1165
Complete thought 1165
Complex sentence 1323, 1407, 1410
Composition 1166
Compound sentence 1323, 1407, 1409, 1410.
Conjunction 79, 100, 121
Copula 343, 424, 496, 647
Correlative adverb 491

D.

- Dative 841, 842
Declarative sentence 1191
Declination 841
Demonstrative pronoun 872, 927, 1262
Dependent adverb 481
Disjunction 125
Disjunctive Judgment 1325

E.

- Exclamatory sentence 1192

F.

- Flexion 81
Full conjunction 121

G.

- Genitive 841, 842

H.

- Half-conjunction 121, 122
Historical present 425

I.

- Imperative sentence 1192
Impersonal judgment 1181, 1262
Independent adverb 491
Infinitive mood 261
Inflection 80, 511
Inflectional language 80
Instrumental 839, 841
Interjection 65, 79, 129, 130, 133, 1178, 1179.
Interrogative sentence 1192
Intransitive verb 285, 286
Isolating language 81

J.

- Judgment 495

L.

- Locative 92, 839, 842

M.

- Mood 441

N.

- Neutral present 424
Neutr l tense 431
Nominative 841, 842, 843

ロ

- ろ 693
六倫 363
ロマンス語 843
論理 123
論理學 92, 155, 155, 160
論理的判定 646, 648, 649, 650

ワ

- わ 740, 871, 932, 933
和英大辭典 583, 635
和歌 1399
和歌八重垣 402
わが 926
或然断定 501
和訓栞 1400
和語說略圖 28
和字正濫抄 1400
和字通例書 141
和田萬吉 102, 462, 477, 509
倭讀要領 168
割 742
われ 932, 933

中

- 位格 79

ヴ

- グント 432, 183, 285, 294, 295, 295, 297

エ

- 遠稱 189, 742, 746

ヲ

- を 402, 403, 560, 561, 564, 562, 574, 578, 580, 581, 588, 592, 594, 607, 610, 617, 620, 691, 694, 696, 834, 838, 840, 841, 842, 847, 855, 858, 860, 924, 927, 934, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000

岡倉由三郎 102, 326
岡澤鉦次郎 400, 677, 740, 751, 757, 943, 946

- 小田清雄 348
をば 600, 749
をり 322

獨逸語の部

日本文法論獨逸索引

<p>A</p> <p>Adjektivum85 Adverbiale839 Adverbium(en)90, 91, 839 Adverbialsatz1169 Attributiva84 Attributivesatz1169 Aufsatz1166, 1170 Ausrufungssatz1186, 1195, 1246 Aussagesatz1246</p> <p>B.</p> <p>Beiwort85 Beziehungsform81</p> <p>E.</p> <p>Einfache Satz1169 Empfindungslaut129, 132</p> <p>F.</p> <p>Formwort81, 82, 101 Fragesatz1246</p> <p>I.</p> <p>Interjektion n129</p> <p>K.</p> <p>Kasus552 Konjunktionen101</p> <p>N.</p> <p>Neben Satz1169</p> <p>O.</p> <p>Objektivesatz1169</p>	<p>P.</p> <p>Partikel101 Prädikat84 Prädikativesatz1169 Präposition83</p> <p>S.</p> <p>Satz495, 1163, 1166, 1169, 1170, 1185, 1186, 1194 Satzäquivalent1182, 1183, 1185, 1186, 1189, 1379. Satzgefüge1408, 1410 Satzverbindung1408, 1410 Subjekt85, 96 Subjektivesatz1169</p> <p>T.</p> <p>Tempus442, 848</p> <p>U.</p> <p>Umstand839 Umstandswort839 Urteil495</p> <p>V.</p> <p>Verbum85</p> <p>W.</p> <p>Wortbiegung81, 82</p> <p>Z.</p> <p>Zeitwort85, 432, 848 Zusammengesetzte Satz1169</p>
---	--

<p>Noun79 Numeral79, 89</p> <p>O.</p> <p>Object97 Objective842, 843 Occurrence431, 432</p> <p>P.</p> <p>Passive288 Participle262 Personal pronoun89 Phrase517, 1167, 1168 Possessive case513, 842, 843 Possessive pronoun926, 928 Predicate496, 818 Preposition79, 82, 83 Pronoun79</p> <p>R.</p> <p>Relative conjunction492</p> <p>S.</p> <p>Secondary interjection1179 Sentence75, 495, 1163, 1166 Sentence adverb491, 493, 502</p>	<p>Sentence introducing491, 492 Sentence modifying491, 492, 493, 502, 511. Sentence word1177, 1179 Simple sentence1409 Singular judgment1263 Subject496 Suffix212 Syntax708</p> <p>T.</p> <p>Tense424, 431, 441 Transitive verb235, 286</p> <p>V.</p> <p>Verb79 Verbal79 Verse167 Vocative542</p> <p>W.</p> <p>Word54, 56, 75, 503 Word group92 Word-introducing491 Word-modifying491, 502, 511</p>
--	---

日本文法論英文索引

明治四拾壹年九月七日印刷
明治四拾壹年九月拾日發行
昭和四年二月廿五日五版發行

定價金拾圓



不許
不許
不許複製
漢譯

日本文法論

著作者 山田孝雄

發行者 大葉久吉

印刷者 澁谷親平

東京市日本橋區本銀
町三丁目十四番地

東京市牛込區山吹
町百九十八番地

所刷印瀨高 所刷印

發行所 關西專賣

東京日本橋區本銀町三丁目
振替貯金口座東京二八〇番
大阪市西區阿波堀通四丁目
振替貯金口座大阪四三番

株式會社 寶文館
株式會社 大阪寶文館

山田孝雄著◎寶文館發行

國民精神振作に關する詔書義解

洋裝全一冊
定價金八拾錢
送料金六錢

日露戰爭歐洲大戰以來、人心放縱に流れ、危險なる外來思想襲來して人心に動搖を來せる折柄、大正十二年九月一日關東地方の大震災あり、於是乎、同年十一月十日大詔發、切に國民精神の作興を促さる。山田先生謹嚴の筆を以て之を奉釋し、此の大詔の眞精神を闡明せらる。國民必讀の寶典として諸學校の賞與品として絶好の讀物たり。

御即位 大嘗祭 大禮通義

洋裝全一冊
定價金八十錢
送料金十二錢

大禮に關しては何人も知らんと欲する所なれども、世間之に關する詳細の記述あるなく、僅にその時々之の新聞雜誌等の記事に因りて其大體を知るべきのみ、山田先生この缺陷に鑑み、往年謹嚴の筆を揮つて本書を著され、斯界唯一の權威書として好評あり、其後久敷絶版となり居りしが、今回訂正を加へ面目を新にして再び江湖に見ゆること、成りたり。前者と同じく戸々必備の寶典、諸學校の賞與品として推奨す。

山田孝雄著◎寶文館發行

大日本國體概論

洋裝全一冊
定價金五拾錢
送料金六錢

明治四十三年時恰も日露戰役終を告げ、世は昌平に狂れて鼓腹擊壤の樂を縱にする時、思想界には種々の思想横流して百鬼白晝に跳梁し、未曾有の盛世動もすれば將來衰亡の因たらんとするの勢顯然たるものあり。山田先生慨する所あり、椽大の筆を揮つて我が國體を闡明せられたるもの本書なり。今回字句内容に改訂を加へて再び世に公にせらる。國民一般殊に育英家の一讀再讀を望む。

國民道德原論

洋裝全一冊
定價金一圓
送料金八錢

世に國民道德を説くもの少からずと雖、多くは道德を標榜してその實我が國を利せんとするものに外ならず、明治天皇が往年教育勅語を下し賜ひて「之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と宣ひし宏遠なる聖旨と相距る遠しと謂ふべし。本書は三種の神器によりて表裏せらるゝ至誠・愛・敬の三徳を基礎として、我が國民の均しく遵守すべき道德を謹嚴に而も痛快に述べられたるもの、萬人必讀を要す。

東京寶文館發行書目

山田孝雄 文學士高木 武校訂

校定 平家物語

布裝全一冊
定價金二圓五十錢
送料金十八錢

平家物語は一面通俗歴史たる外、他面文學上の著作及び語り物として古來もて囃されたる書なり。其文優雅にして而も道健、莊重にして而も豪宕、句々金玉の響あり、凡そ歴史文學に従ふ者皆讀まざるなし。唯現今流布の諸本は何れも「一方檢校以吟味令開板之者也」の奥書ある略本にして、記事の脈絡を失ひ、しかも誤脱杜撰少からざるは遺憾なり。校訂者は我が文壇の爲に是等の俗本を驅逐し、眞正の本を呈供せんと欲して爰に本書を公刊せられたり。本書の底本は一方流平曲中興の祖と目せらるゝ沙門覺一の奥書ある所謂覺一本の別本にして、此外東京美術學校所蔵の古活字本その他の善本を參考して嚴密に校訂し、讀者をして眞正平家物語の如何なるものなるかを知らしめたり。讀者これに因りて安じて平家物語の研究に従ふを得べく其の學界を益するの多大なる知るべからず。尙卷末には事實としての索引及文學としての索引を添へて披讀に便せり。

蘆洲池田四郎次郎著 (内容見本御申込次第進呈)

賜天覽 故事熟語大辭典

菊判 定價十圓(稅卅二錢)
四六判 定價七圓 特價六圓
送料内地廿四錢

蘆洲池田先生は我國漢學界の耆宿にして現に大東文化學院教授二松學舎教授たり、本書は明治三十六年起稿、大正元年脱稿、年を閱する正に十、其間一室に籠居して一切の來客を謝絶し終始獨力を以て完成せられたる空前の浩著なり。蒐録の語數五萬有餘、收材多方面に互り、解釋穩健、出典精確、挿繪多數、卷末には完全至便なる新式索引三種を附す。

服部宇之吉總纂

大漢和辭典

四六判布裝美本一冊
定價金三圓八十錢
送料金十二錢

本書は實用漢字九千八百餘を選び之に懇切なる明解を施し、上欄には、約四萬五千の語彙より成る音訓熟語便覽を配したるものにして、文字の排列は實用の廣きものを先にして活字の大きさによりて之を區別し、又上欄の熟語と聯絡を保たんが爲に番號を付したり。尙ほ草字を挿入し、檢索に新機軸を案出せる等、あらゆる特色を有す。現に諸學校の指定字書として汎く採用の榮を蒙りつゝあり。

東京寶文館發行書目

山田孝雄◎寶文館發行

日本文法講義

布一冊裝 定價金四圓五十錢
全一冊 送料金十八錢

日本口語法講義

布一冊裝 定價金三圓八十錢
全一冊 送料金十八錢

敬語法の研究

布一冊裝 定價金三圓八十錢
全一冊 送料金十八錢

萬葉集講義

卷第一 布裝 定價金三圓五十錢
出來 一冊 送料金十八錢

本書は現代の口語文語を内容とし、往々古代文法の或るものにも論及せり。所説精緻にして的確、前人未發の言多し。殊に句に人稱を説きたること、敬語に文法學上の説明を下したること、吾便に合理的説明を與へたること等は本書の特色なり。現代の口語は複雑多端なるが、何人も習慣により大體その用法を誤らずと雖、その語法を説明せんは至難の業たり。本書はこれに關して精細の説明を與へり。本書は敬語法を口語、候文、普通文の三つに分ち、詳細にその用法を説明せるものにして、敬語法に關してかくも徹底したる研究を公にせるもの本書實に嚆矢たり。近時萬葉集に關する著書尠からずと雖、本文語辭の解釋の穩健にして引證的確人をして言々首肯せしむるもの殆ど有ら。し正確に萬葉を學ばんとする者は本書を措いて他に求む可らず。

東京寶文館發行目録

改訂 日本大歴史

青木武助著 布裝 上下各五圓半錢
全二冊 送料各十八錢

道徳の原理

吉田博士 致著 布裝 定價三圓八十錢
全一冊 送料十八錢

陸象山の哲學

三島 復著 布裝 定價二圓三十錢
全一冊 送料十二錢

昭和の新興と世界美化

中柴 惠洲著 布裝 定價三圓二十錢
全一冊 送料十八錢

神道の現代的研究

橋本文壽著 布裝 定價四圓五十錢
全一冊 送料十八錢

儒學史

宇野博士 哲人著 上卷 定價五圓八十錢
一冊 送料十八錢

新日本の自主的建設

伯荒 爵 德著 布裝 定價六十錢
全一冊 送料六錢

忠道東西思想の研究

越川 彌 榮著 布裝 定價八十錢
全一冊 送料廿四錢

10532

東京寶文館發行書目

佛陀の最高哲學とカント哲學	龜谷聖馨著	布裝 全一册	定價一圓五十錢 送料八錢
華嚴聖典研究	同著	布裝 全一册	定價五圓六十錢 送料十八錢
日本儒教概說	文學士 岩橋逸成著	布裝 全一册	定價三圓 送料十二錢
倫理學演義	文學博士 吉田靜致著	布裝 全一册	定價六圓五十錢 送料廿四錢
倫理概論	荻原擴著	布裝 全一册	定價五圓八十錢 送料十八錢
國民道德要領	吉田慶祐著	布裝 全一册	定價二圓五十錢 送料十二錢
日本國民道德史	文學士 伊藤千眞三著	布裝 全一册	定價二圓 送料十錢
國民道德と現代思想	文學士 櫻井賢三著	布裝 全一册	定價二圓二十錢 送料十錢

終